第 2 章　本論・各集落について

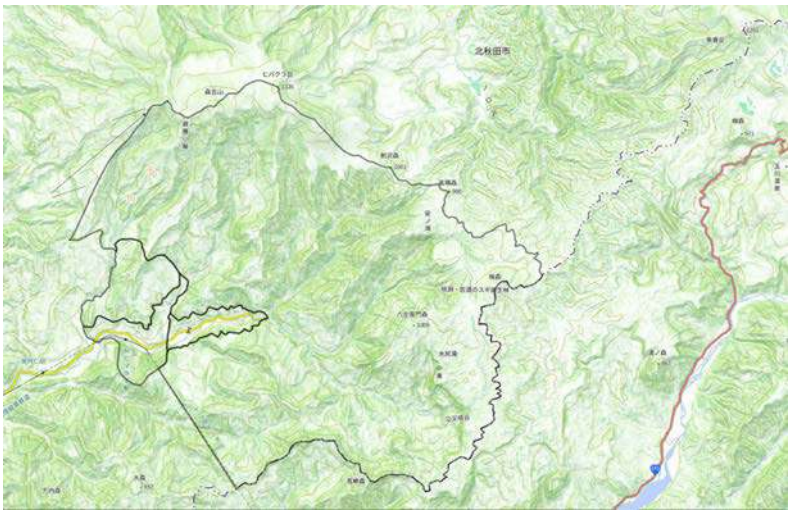
2-1. はじめに

本章では、阿仁川流域沿いの打当(打当内)、戸鳥内、比立内、笑内、根子、粕内、阿仁合(湯口内)、惣内、米内沢の 9 集落を調査対象集落について、それぞれ地形・地質・水利・自然、地域経営（産業・生業）、信仰、建築・集落構造の項目に分けて論じる。
また、各集落について現地で実見した内容、ヒアリング、地理院地図から得られる標高データを元に、標高断面図を作成し、その集落の性質と地形・地質情報をダイアグラム化した。

2-2.打当内

2-2-1. 集落概要

森吉山の南方、東から流れる阿仁川に北からの支流が合流する地点にあたる。平地はそれぞれの河川に沿って細長く分布する。川沿いは田、山際は畑として利用されている。集落西方には阿仁マタギ駅があり、南東からトンネルを抜けてきた秋田内陸線が阿仁川沿いの平野に出る地点にあたる。



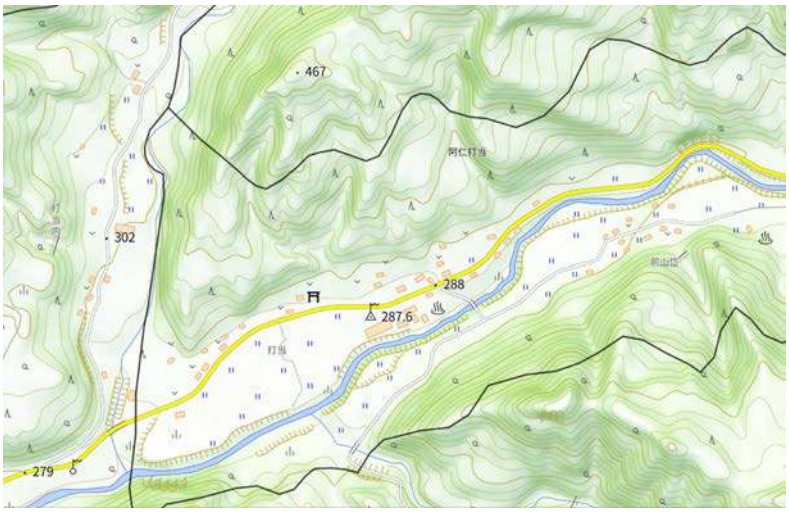


図 2 打当内の地形

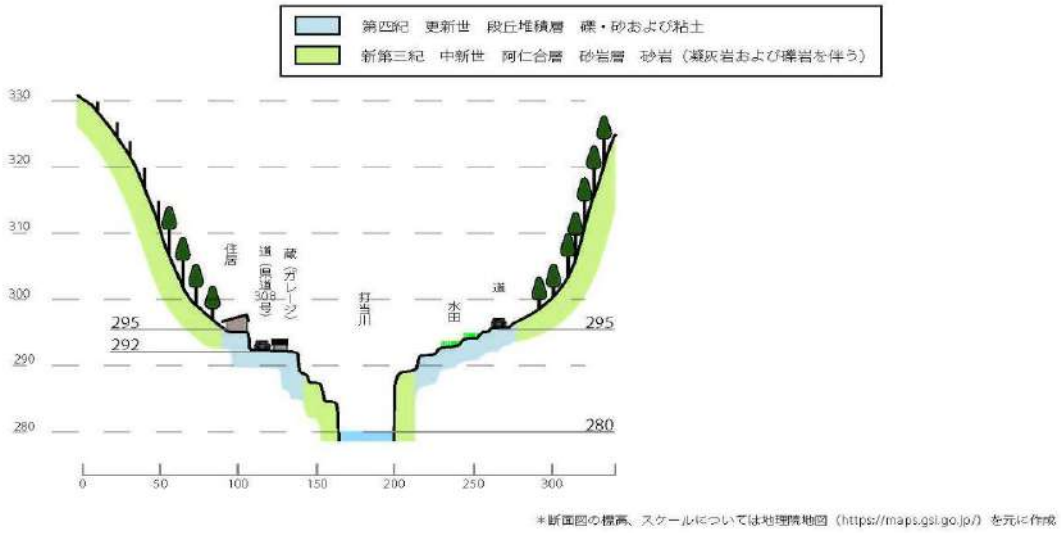


図 3 断面図_打当内

2-2-2.地質・地形・水利・自然災害

図 4 航空写真（左）、地形図（中）、地質図（右）

打当内は堆積岩と火成岩の地質の境界に隣接している。村の上流は堆積岩で、下流は主に火成岩である。地形図によると、打当内川と住居と水田（田圃）の地域は谷底平野と呼ばれて、これは打当内の最も低い部分である。打当内の山は全部非火山性山地であり、平均的な傾度は 20 度から 40 度の間で、最大傾度は 40 度以上である。傾斜はそこまで厳しくないが、地すべりや土石流が発生する可能性がある。地すべりは主に村の上流域で発生していることが確認できる。

図 5 自然災害

打当内の自然災害は大きく分けて地すべり、土石流、雪崩の 3 種類がある。また、現地調査にて土砂災害を注意喚起する看板が確認できたことから、この地域で地滑りや土石流が頻繁に発生していることを示している。さらに、地理的な条件から、阿仁川流域は冬の厳しい寒さのため雪が多く、雪崩も村民の生活と生産には大きな影響をもたらす。 特に住宅への影響が大きく、上の写真のように、長期間人が住んでいない家では、雨や雪で大きな被害を受けることがあると考えられる。

2-2-3.地域経営（産業・生業）

本項は、第 1 回調査 3 日目（2021 年 9 月 3 日）に行った、鈴木英雄氏へのヒアリングを元に記述した。

【農耕】

現在は畑作（豆、粟、ヒエ）と林業が基本的な生業である。かつては粟・ヒエを乾燥させる小屋があった。農耕と堆肥のための牛馬を手放した後、草刈り場だった場所を分けて杉林に変えた。

【林業】

かつては林業用のトロッコが通っていた。

【マタギ】

銃規制が厳しくなり、狩猟免許が必要になった昭和 50 年代頃を境に、マタギは減少した。鈴木氏によると、阿仁全体で、最盛期にはマタギは 200 人ほどいたが、今は 36 人である。年に 2 回（冬と春におよそ 1 か月ずつ）猟期があり、猟と罠の見回りを行っている。村ごと

に猟場があり、互いの猟場は荒らさない。罠は現在、有害鳥獣駆除のために仕掛けている。肉・内臓は仲間内で分けて、胆・皮は入札を行い換金した。なお、皮が売れたのは昭和 25-30 年頃までであり、戦時中は軍用の服などに需要があった。熊だけでなく、ムササビの皮も売れた。

病院が遠いため、生活に必要な薬は熊に頼っていた。熊の胆や、解体時に出る血は、乾燥させて薬とした。血は、貧血に効くとされた。

打当内のマタギは、佐竹藩のお抱えのマタギを務めていたことがある（鉱山との人的交流はあまりなかった）。

【行商】

阿仁マタギ（打当内、比立内、根子の 3 集落のマタギ）は、熊の胆などを売る行商を行っていた。だが、打当内では行商人が比較的少なかった。

2-2-4.信仰

マタギ神社、打当山神社、庚申塔が鎮座。神社はともにマタギの神である山神を祀り、の資料にはオコゼが祀られている。山神は容姿がその供物に醜いオコゼが利用される。

図 6 打当山神社(左)・マタギ神社（中）・山神に供されたオコゼ（右）

2-2-5.建築・集落構造

【集落構造】

- 居住域は小字内に点在しているが、大まかに三つの塊で構成される。県道 308 号線（河辺阿仁線）沿いに位置する下流側の路村（仙北渡道上ミ）と、打当川を挟み県道の南に並行する山沿いの道路に沿った上流側の路村（前山岱）と、さらに下流の阿仁マタギ駅北側の山を背にした集落（中村水上沢）である。中村水上沢に関しては実地調査を行えなかったため、Google Earth のストリートビュー機能で詳細を補完した。なお打当川は阿仁川の上流部の名称であり、戸鳥内領域から名称を阿仁川へと変える。
- 余剰地は利用して水田開発を行なっている。調査では、体系的な水路の存在は確認できなかった。
- 小字内に寺はなく、墓地は上流側の路村に向かうための橋の手前に独立してある。
- 神社は中村水上沢周辺の集落に位置する八幡神社と、マタギ資料館北東に山を背にして位置する打当山神社の二社である。しかし、集落から隔絶された打当川上流の山の中に阿仁マタギが狩猟の際に祈念を行うマタギ神社が存在する。

・ 集落内の主要な公共建築物は、下流側に位置する秋田内陸線阿仁マタギ駅のみである。

【建築】

〈耕配置と屋根形式〉〈母屋と付属屋の関係〉

・ 敷地が広く古くからあるであろう住宅の母屋は、長手方向の平入形式で平屋が多い。また、玄関上部の屋根のみ妻入り屋根になっているものもある。道路沿いに耕作地を構え、母屋は道路からセットバックした配置となっている。
・ 敷地が狭く比較的新しい住宅は、中村水上沢の県道 308 号線沿いとマタギ資料館の東側に数軒あり、招き屋根もしくは片流れ屋根のもので二階建てである。道路に対して、招き屋根の場合は屋根勾配が強い平側、片流れの場合は平面の裏側が面している。母屋の横や手前に耕作地を構えているものが多い。
・ また、多くの住宅が倉庫やなどの付属屋を母屋の手前または横に持っており、その屋根の形態は切妻・片流れ・腰折れ・ドーム状と様々だった。
・ いずれにしても、屋根の積雪を玄関口と道路（公共空間）に落とさないことを目的にこのような配置と形状になっていると考えられる。また付属屋が母屋の裏にないのは、屋根形状の関係で落雪の影響を受けないためであると考えられる。

〈基礎・構造的特徴〉

・ 母屋付属屋ともに、道路からセットバックした配置の建築物は高基礎になっている。しかし、県道 308 号線（河辺阿仁線）の南側は打当川に向けて傾斜しているため路面がＧＬより高く、道路に面した建築は深基礎仕様となっていた。
・ 基礎素材は、修繕のされた古くからの住宅や比較的新しい住宅であれば鉄筋コンクリート造であるが、簡素な住宅はコンクリートブロックを組積したものもあった。
・ 〈外壁・意匠的特徴〉
・ 全体的に比較的簡素な作りで装飾的要素は見られなかった。母屋はガルバリウム鋼板を用いた外壁がほとんどで、付属屋では亜鉛めっき鋼板を用いたものも散見された。
・ また、ある妻入りの付属屋（蔵）では、破風や基礎立ち上がりに接する外壁などで一部樹脂製の波板を使用していた。

【構築物】

〈雪の仕舞い方〉

・ 積雪対策を徹底している。例えば、各住宅の勝手口部、一階サッシ部、外壁の電気メーター部などには、樹脂製の波板と木材を組み合わせて製作された、立てかけるタイプの雪除けが見られた。また植栽には、既製品であろう合掌型の木製雪除けが被せられていた。

・ 集落の公共物である消火栓には、樹脂製の波板と木材を組み合わせて製作された、切妻屋根の設置型雪除けが見られた。また共同のゴミ置き場も、金網製の既製品に加工したブルーシートや亜鉛めっき鋼板を用いて全体の隙間を埋めるような工夫が見られた。

【材料まとめ】
・ 全体的に比較的簡素な作り
・ ガルバリウム鋼板
・ コンクリートブロック
・ 亜鉛めっき鋼板（トタン）
・ 樹脂製の波板
・ ブルーシート

2-3.戸鳥内

2-3-1.集落概要

森吉山の南南西方、東から流れる阿仁川の支流の打当川が南西に蛇行する地点にあたる。阿仁川沿いに 2 か所集落があり、家屋周辺に畑、阿仁川沿いに田として利用されているほか、集落北方の山地のうち 200m*400m ほどの範囲が棚田として利用されている。秋田内陸線はトンネル・鉄橋によって直線状に集落内を通る。

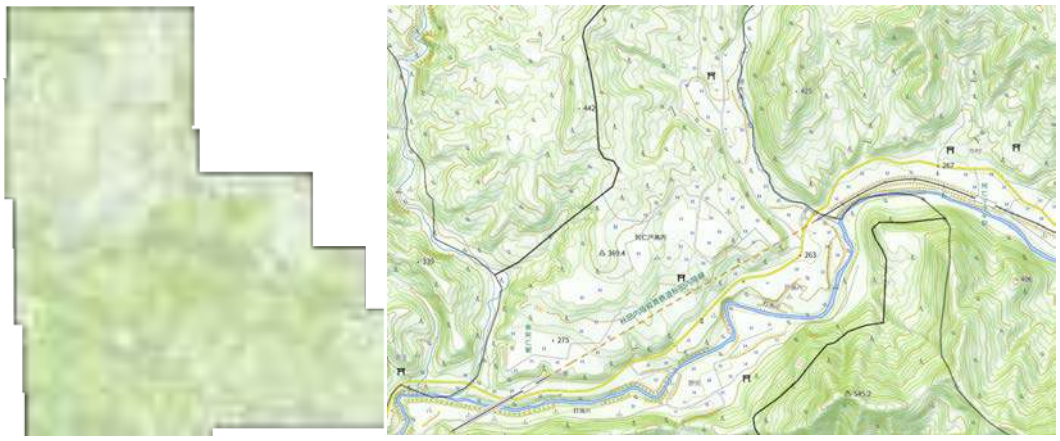


図 7 戸鳥内の地形

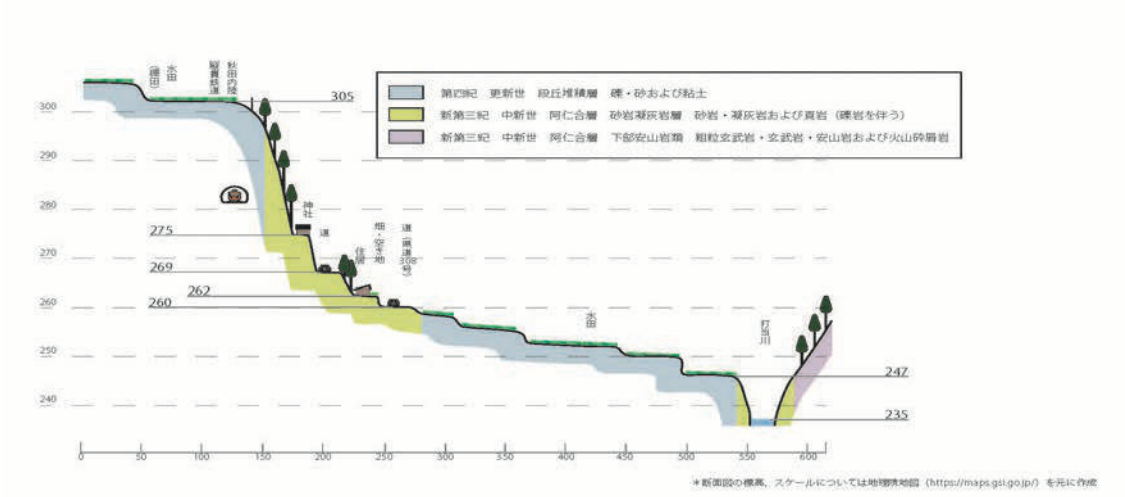


図 8 断面図_戸鳥内

2-3-2.地質・地形・水利・自然災害

図 9 航空写真（左）、地形図（中）、地質図（右）

戸鳥内は堆積岩と火成岩の地質の境界に隣接している。阿仁川に近いは主に火山岩で、山の方は主に堆積岩である。地形図によると、川と田んぼは谷底平野にあり、そこは集落の最も低い部分である。山の近くは砂礫段丘で、砂礫段丘上に住居と畑がある。砂礫の特徴から、土砂災害が発生する可能性がある。また、集落周辺の山は全部非火山性山地である。平均的な傾度は 20 度から 40 度の間で、最大傾度は 40 度以上である。傾斜度は非常に高くはないが、地滑りや土石流が発生する可能性もあると考えられる。

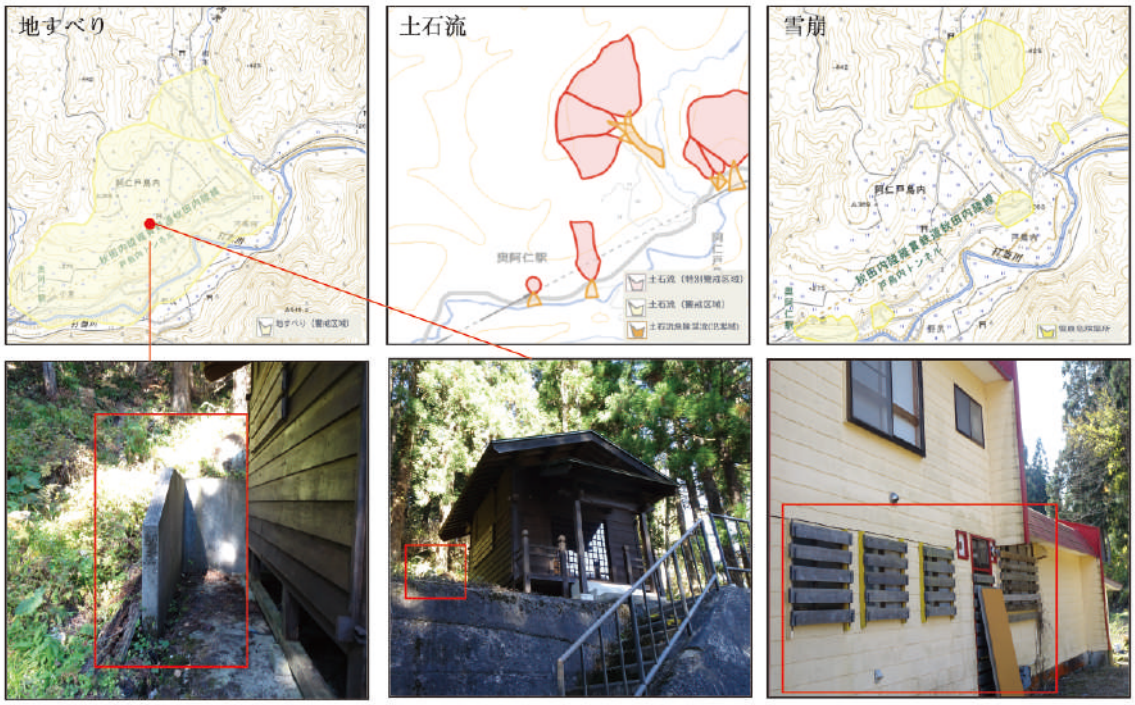


図 10 自然災害

戸鳥内はほぼ全域が地すべり地帯に覆われている。土石流危険地帯は主に戸鳥内沢の周辺にあたる。戸鳥内では雪崩の可能性から、村民は家 1 階の窓を板で保護していることを調査の時（11 月）に発見した。これは潜在的な自然災害に対する住民の対策だと考えられる。また、砂礫段丘の高い位置にある神社は建物の基礎を保護するためのコンクリート低壁が築かれていることから、ここは地すべりが発生する可能性があると考えられる。

2-3-3. 地域経営（産業・生業）

【稲作】

集落から森を隔てたところに、近代的な直線から成る棚田がある。この棚田の成立経緯は不明だが、おそらく畑等が転用されたものだと考えられる。現在は、生活上の必要性からではなく、主に景観のために維持されているのではないかと推測される。

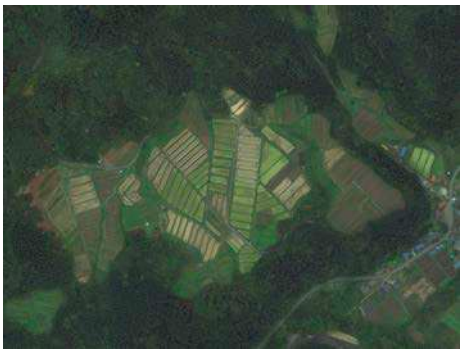


図 11 戸鳥内の棚田

【畑作】

畑は主に住居の側に見られる。

【きのこ栽培】

山中の道のそばで、きのこ栽培を行っている様子を確認できた。

図 12 きのこの原木と思われるもの

2-3-4.信仰

道路と集落の北側にある山の斜面に 1 社鎮座。山をあがると棚田があり、そこへ続く道路に面している。

2-3-5.建築・集落構造

【集落構造】

・ 居住域は小字内に点在しているが、大まかに三つの塊で構成される。東西を貫く県道308号線（河辺阿仁線）沿いに展開する二つ集落（小倉岱・家ノ前）と、県道308号線に直行するように交わり北上する道路を登った先に展開する谷間の集落（栩木沢）である。
・ 小字内に寺はなく、墓地は栩木沢に向かう道路の最深部に一箇所のみ独立してある。
・ 神社は、家ノ前北東側の山の中に集落側を向いた小規模なものがある。しかし鳥居と神社の向きから正当なアクセス方法は、現在整備された棚田へ向かう東西の道路ではなく、山肌を登っていく南北の動線であった。
・ 集落内の主要な公共建築物は、下流側に位置する秋田内陸線奥阿仁駅のみである。

【建築】

〈耕配置と屋根形式〉〈母屋と付属屋の関係〉

・ 敷地が広く古くからあるであろう住宅は、栩木沢と家ノ前でよく見られる。母屋は長手方向の平入で、中央部は妻入りの二階建ての形式となっており、玄関部の下屋も妻入りになっているものが多い。道路沿いに耕作地（畑）や庭を構え、母屋は道路からセットバックした配置となっている。
・ 谷間の栩木沢集落は特に、石を用いて傾斜地に畑を作り豊かに耕作・庭を行なっている傾向にある。
・ 敷地が狭く比較的新しい住宅は県道308号線沿いに多く見られる。母屋・付属屋に関わらず、招き屋根もしくは片流れ屋根のものが多い。これらは道路に対して、招き屋根の場合は屋根勾配が強い平側、片流れの場合は平面の裏側が面している。
・ また県道308号線沿いには敷地は広いのにも関わらず、片流れ屋根をベースとした比較的新しいタイプの住宅も見られる。これらの傾向として、母屋は二階部の屋根は片流れになっているものの、下屋は平入になっているなど複雑な形状のものが多い。
・ また谷間の栩木沢集落は、倉庫など付属屋を母屋の手前または横に持っているものが多く、その屋根の形態は切妻・片流れと様々だった。一方で県道308号線沿いの集落については、古くからの住宅は付属屋を持っているが、新しい住宅は付属屋と母屋が一体になっているものが多い。
・ 〈基礎・構造的特徴〉
・ 母屋付属屋ともに、道路からセットバックした配置の建築物は高基礎になっている。しかし、県道308号線（河辺阿仁線）の南側は阿仁川に向けて傾斜しているため路面がＧＬより高く、道路に面した建築は深基礎仕様となっていた。
・ 基礎素材は、修繕のされた古くからの住宅や比較的新しい住宅であれば鉄筋コンクリート造であるが、簡素な住宅はコンクリートブロックを組積したものもあった。
・ 〈外壁・意匠的特徴〉

・　全体的に比較的簡素な作りで装飾的要素は見られなかった。亜鉛メッキ板を用いた外壁がほとんどであった。
・　しかし、平入で中央部が二階建ての妻入り形式になっている住宅の一部で、破風から突出している棟木と母屋が、縦方向に二重になっているものが見られた。

【構築物】
〈雪の仕舞い方〉
・　積雪対策を徹底している。例えば、各住宅の勝手口部、一階サッシ部、外壁の電気メーター部などには、樹脂製の波板と木材を組み合わせて製作されたものや木製の立て掛けるタイプの雪除けが見られた。また植栽には、既製品や自作の切妻型の木製雪除けが被せられていた。
・　また、一階サッシ部に複数の木板をはめて、積雪によって窓ガラスが割れることを防ぐ機構が備えられている。11 月 8 日時点で最大まで板がはめられており、さらに北側立面のサッシには最大まではめられた板に斜材を打ちつけ取り外し不可能にしている住宅も見られた。
・　農業用ビニールハウスの架構にブルーシートを張ったものを車庫として利用している住宅も見られた。
・　集落の公共物である消火栓には、河辺阿仁線沿いではブルーシートと木材を組み合わせたもの、亜鉛めっき鋼板製のものなどの合掌型に設置する雪除けが見られた。

【材料まとめ】
・　全体的に比較的簡素な作り
・　ガルバリウム鋼板
・　コンクリートブロック
・　亜鉛めっき鋼板（トタン）
・　樹脂製の波板
・　ブルーシート

2-4.比立内

2-4-1. 集落概要

森吉山の南西方、東から流れる阿仁川と南から流れる比立内川の合流する地点にあたる。平野内の南西の山際に集落と畑があり、川が蛇行して袋状になった場所に田が立地する。上流から引水した河川の水を、水路によって集落や田畑に分配している。秋田内陸線は南東から北西に直線状に通り集落中心部に比立内駅がある。

図 13 比立内の地形（出典：地理院地図 Vector）

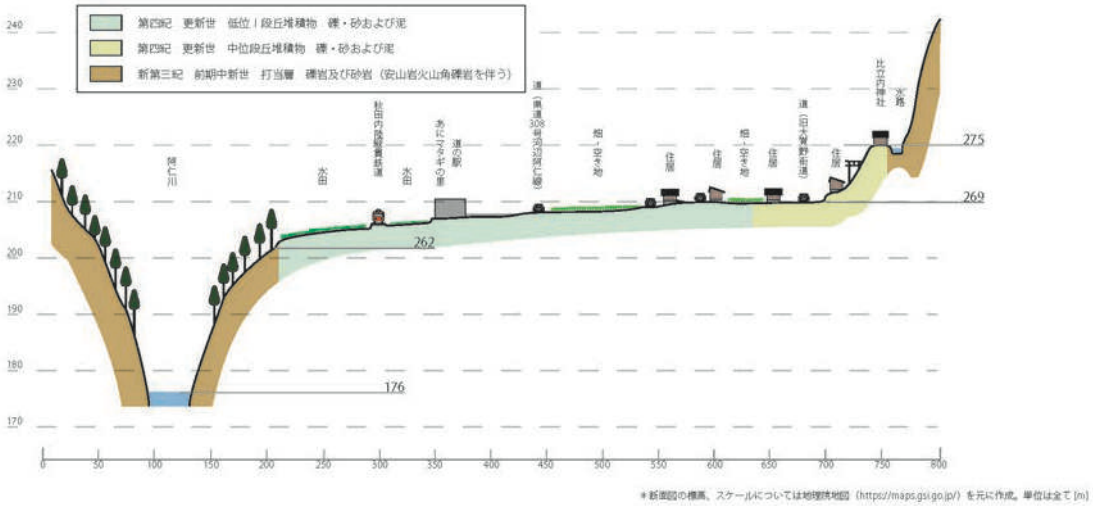


図 14 断面図_比立内

2-4-2. 地質・地形・水利・自然災害

図 15 航空写真、地形図、地質図

比立内は堆積岩、火成岩の地質の境界部に位置する。阿仁川沿いに展開する集落の部分は堆積岩で、支流の比立内川沿いに展開する部分は火成岩である。集落は基本的に川沿いの低位段丘上に立地し、西側には緩い斜面（斜度 15 度以下）がある以外、周りは主に斜度 40 度以上の非火山性山地に囲まれている。

【水利】

水利に関して、比立内は主に 2 本の水路がある。2 本とも沢の上流から分水し、大抵平行に流れている。一本は直接集落の中心に流れ込む、もう一本は神社の裏、つまり山裾のところに流れて、それは第 9 代佐竹義和が中山間地の開発に力を入れていた時、川から田んぼに水を引くために作られた人工の堰という。

【自然災害】

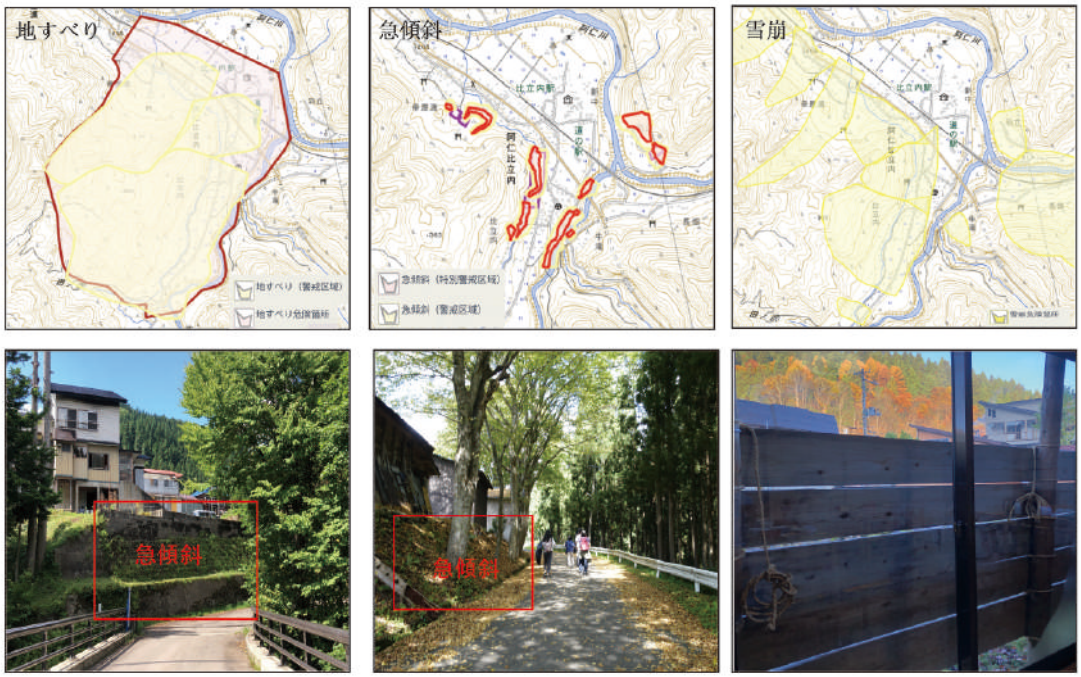


図 16 自然災害

自然災害図によると、比立内の地すべりの範囲は非常に大きく、山と川の近い地域も全部含まれている。現地調査にて、比立内の全体を 3 つの段丘に分けると、1 つ目は山、2 つ目は集落と畑、3 つ目は川となることが判明した。 段丘 1 段目と 2 段目の間は、神社などの建物群で結ばれる。段丘 2 段目と 3 段目の接続部では、写真のような急傾斜地が見られた。そして、急傾斜地の警戒区域は山の近い地域と川の近い地域になる。建物は大雪の影響と冬の寒さを受けるので、調査の時（11 月）には窓の外部は木板で保護されていた。

2-4-3. 地域経営（産業・生業）

本項は、第 1 回調査 3 日目（2021 年 9 月 3 日）に行った松橋旅館の方へのヒアリングを元に記述した。

【林業】

ブナを運ぶ森林鉄道（トロッコ）が通っていた。昭和 30 年頃までは辺りの山は全て里山（雑木林）だった。雑木林のことを「芝山」と呼んでいた。

【牧畜業】

馬に刈った草を食べさせて堆肥作りをしていた。牧草はお盆になる七月前に刈入れをしていた。牧草地のことを「野場（ノバ）」と呼んでいた。

【マタギ】

比立内のマタギは現在 10 人ちょっとである。現在はマタギだけでは生計を立てられない。松橋旅館の方によると、30 年前は旧阿仁町（比立内、根子、打当）で 100 人以上のマタギ

がいたが、現在は、比立内で 10 人、打当で 6 人くらいである。
かつては巻狩りと言い、春に冬眠から出てきた熊を集団で狙った（5 月頃まで)。春の熊は冬眠中食事をしておらず、胆汁がよくたまっているからである。熊以外は、11 月から 2 月くらいまで猟をした。戦時中はテンの皮（パイロットの帽子・襟巻き用などに使用)、ウサギの皮（手袋に使用）などがよく売れた。
【行商】
比立内は昔から交通の要衝で阿仁鉱山と関係があり、働く場所があったため、行商をしなかった。
【出稼ぎ】
冬になると出稼ぎに行く。出稼ぎに行けない人は、山で炭を焼いて木炭にして持って帰ってくる。
【稲作】
かつて山裾から下は全て水田だった。神社の裏の沢（図 1）は、第 9 代佐竹義和が中山間地の開発に力を入れていた時に作られた人工の堰であり、岩野目まで流れている。
水源は 3 段階にわたって変えられた。最初は慶長年間に積沢から水を引き、水田を開発した。次にタヌ沢（田ノ沢？)、その次は鍰内（からみない）から水を引いた。詳しい開発年代は村に 3 度の大火事があったため、記録が残っていない。
【養蚕】
松橋旅館では養蚕を行っていた。
【発電所】
明治 40 年頃に発電所ができた。700ｍほどの高さから水を落として発電していた。

2-4-4. 信仰

上流から分水した水路に沿って、取水口に山神社（マタギに関連した山岳信仰)、中流部に太平山信仰、下流部に千手観音を祀る比立内神社が鎮座。川にかかる橋の付近には祠が祀られている。
集落の生活用水はこの水路一本に依存しており、重要なものであった。太平山と書かれた鳥居には、社殿が存在しない。

図 17 比立内神社・太平山 鳥居

2-4-5. 建築・集落構造

【集落構造】

・集落中心部に比立内駅がある。
・居住域は大まかに三つの塊で構成される。国道 105 号線に沿って展開するものと、秋田内陸線以北に展開するもの、比立内川と阿仁川が合流する地点周辺（積沢、前田表）に展開するものである。
・積沢、前田表には神社、精肉店、旅館、郵便局、材木店などがある。
・阿仁川が蛇行して袋状になった場所に田が立地しており、その北東には北秋田市立大阿仁小学校、東には特別養護老人ホームが位置している。
・国道 105 号線が県道 308 号線に分岐する。
・交通の要所であり、かつて峠を越える際に、比立内に滞在した人が多かったことから、商業を営む家が周辺に比べて多い。『道の駅あに』があるのもそのため。
・『道の駅あに』には熊や鹿の剥製などの展示、鹿肉、山菜、クロ文字茶、またたびなどが販売されている。食堂ではまたたびラーメンや、馬肉丼を食べることができる。
・鍛内沢から引水した河川の水を、水路によって集落や田畑に分配している。
・鍛内沢は阿仁比立内の県道 308 号沿いを流れる沢で、比立内川の上流部分に当たる。

【建築】
〈耕配置と屋根形式〉〈母屋と付属屋の関係〉
・　陸屋根、片流れ屋根、腰折れ屋根、招き屋根、切妻屋根など様々な屋根の形式が見られるため傾向として的確に類型化することは難しい。
・　比較的大きな住宅の母屋は、比立内川東岸の山際（積沢）でよく見られる。この母屋は主に二種類で、一つは長手方向の平入で、中央部は妻入りの二階建ての形式となっており、玄関部の下屋も妻入りになっているもの。一つは、二階建て大屋根妻入りのものである。それらは、道路沿いに耕作地（畑）や庭を構え、母屋は道路からセットバックした配置となっている。
・　大きな住宅以外は、二階建ての片流れ腰折れ屋根の簡素なものが多い。片流れ屋根の住宅に関しては、道路に対して平面の裏側が面している。
・　また、多くの住宅が倉庫やなどの付属屋を母屋の周囲に持っており、その屋根の形態は切妻・片流れ・腰折れ・ドーム状と様々だった。

〈基礎・構造的特徴〉
・　母屋付属屋ともに、道路からセットバックした配置の建築物は高基礎になっている。しかし、県道 308 号線（河辺阿仁線）の南側は阿仁川に向けて傾斜しているため路面が GL より高く、道路に面した建築は深基礎仕様となっていた。
・　基礎素材は、修繕のされた古くからの住宅や比較的新しい住宅であれば鉄筋コンクリート造であるが、簡素な住宅はコンクリートブロックを組積したものもあった。
・高基礎、深基礎に立てかけるように薪を積んでいる家が多い。

・基礎高により一階部分の階高が GL よりも高くなっている家屋は、道路から橋をかけて玄関に入る構造になっている。
・基礎高により一階が R C 造の車庫や倉庫で二階以上が居住域になっている母屋は、二階玄関部に正面からアクセスする階段の幅だけ道路からセットバックした配置となっている。

〈外壁・意匠的特徴〉
・玄関アプローチの橋は簡易的な屋根や外壁で囲われており、樹脂製の波板など透明な素材が多い。二重扉の役目を果たしているものもある。
・比較的大きな住宅の母屋の一部で、破風から突出している棟木と母屋が、縦方向に二重になっているものが見られた。
・積沢の母屋に関しては、西側の比立内川と東側の山際の間の一部で、白い破風面に黒い束と貫の木材を表出させて意匠的に見せているものが確認できた。

〈松橋旅館〉
前田表に位置する旅館。築 160 年で大黒柱が 3 本もある大規模な建物。
現在のエントランスと入って右手側の部屋は、かつて土間と馬屋だったものを改装。根太には太い栗の木が使われている。
かつて養蚕業を営んでおり、養蚕用の部屋は二階で、からかさ天井という意匠が施されていた。養蚕用の部屋と隣の部屋を仕切るふすまの絵は寺崎広業（後の秀斎）という画家が描いたもの。

〈雪の仕舞い方〉
・樹脂製の波板と木材を組み合わせて製作された、立てかけるタイプの雪除けが見られた。
・　サッシ部に複数の木板をはめて、積雪によって窓ガラスが割れることを防ぐ機構が備えられている。取り外し可能なものと固定されているものがある。Google Earth のストリートビュー機能で確認した限り（2014 年 7 月時点）では、住宅や倉庫の窓では板がはめられたままのものが多かった。

2-5.笑内

2-5-1. 集落概要

森吉山の南西方、南東から流れる阿仁川が蛇行し、北に向かって流れる地点にあたる。西方の山地に山神社があり、この周辺から水路によって集落やその周辺の畑に引水している。秋田内陸線は南北に通り集落の東のはずれに笑内駅がある。

図 18 笑内の地形

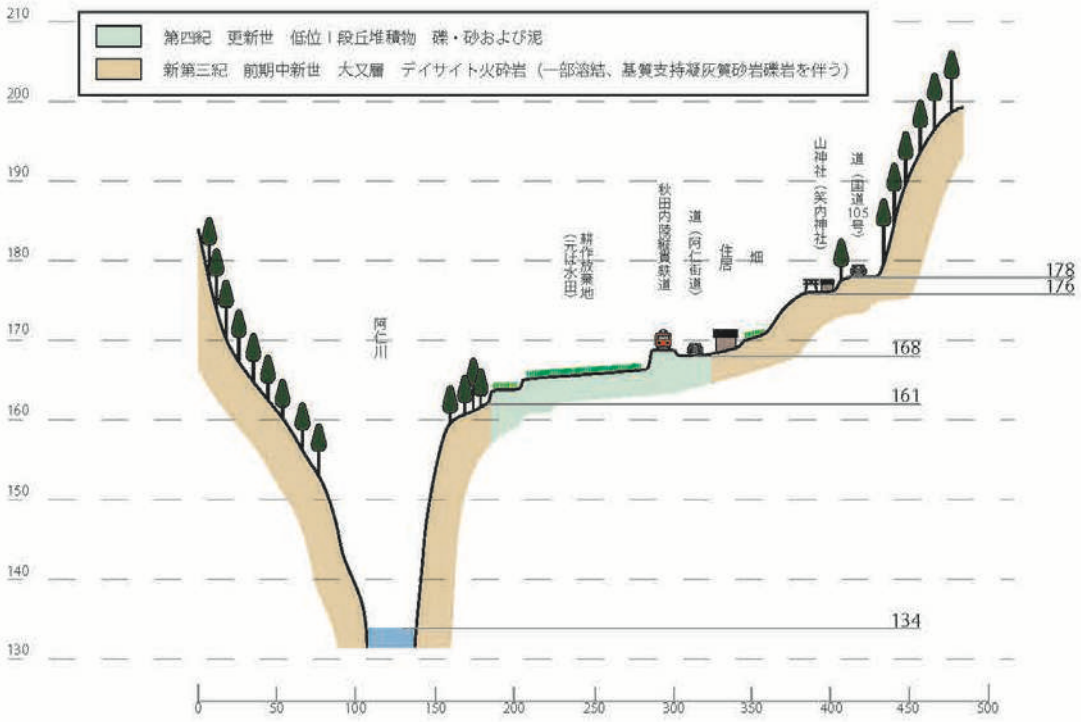


図 19 断面図_笑内

2-5-2. 地質・地形・水利・自然災害

図 20 航空写真（左）、地形図（中）、地質図（右）

笑内は火成岩の上に位置する。川沿いには低位段丘があり、集落はその上に立地している。東側は斜度 40 度以上の非火山性山地に遮断され、西側は主に斜度 20 度以上の非火山性山地と隣接する。

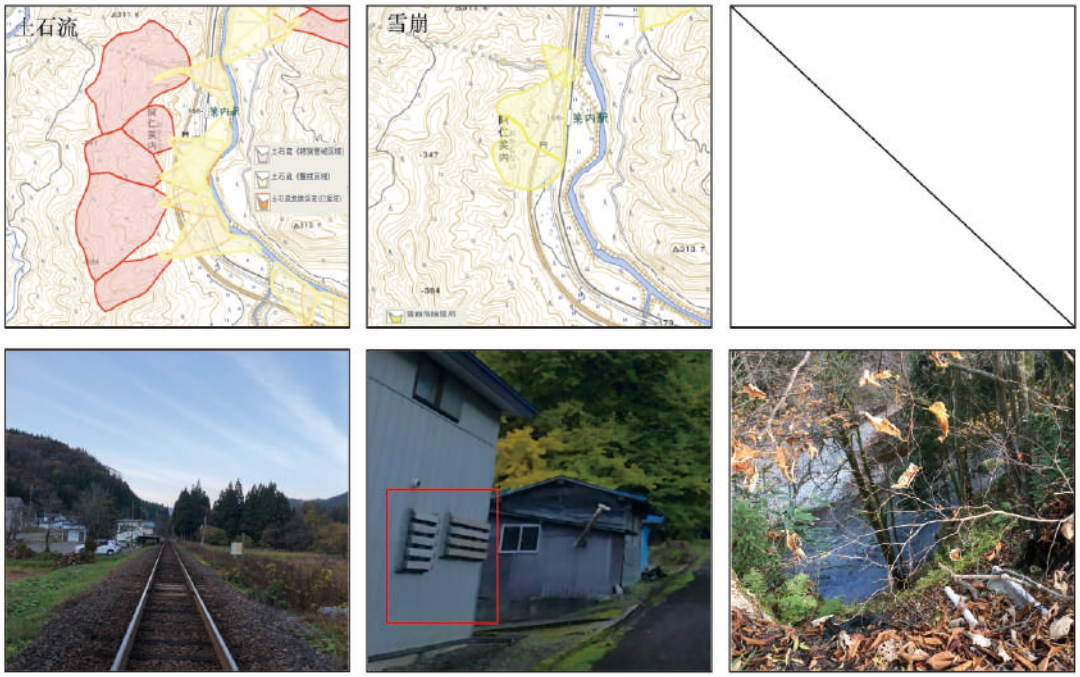


図 21 自然災害

笑内には全体的に非常にはっきりとした三つの段丘があり、山が第一段丘、住居や畑が第二段丘、川が第三段丘となっている。 一段丘と二段丘のつながりは、神社とその周辺の建物である。二段目と三段目のつながりは、図 4 右下のようにはっきりして急傾斜地である。しかし、笑内の自然災害には大きく分けて土石流と雪崩の二種類がある。11 月の調査時には、

大雪と寒さから守るため、民家の 1 階の窓には板が張られていた。

2-5-3. 地域経営（産業・生業）

【稲作】

川の付近には水田が存在する。

【畑作】

線路と阿仁川の間にそば畑が広がっている（図 5)。また、住居の敷地内で畑作を行っている様子が確認できた（図 6)。

図 22　線路の左側にそば畑が見える（左)、家と畑（右）

2-5-4. 信仰

集落から比較的山寄りの平地に山神社(笑内神社）が鎮座。社殿は茅葺屋根をトタン葺きとし、鳥居は金属製。

図 23　山神社（笑内神社）

2-5-5. 建築・集落構造

【集落構造】

・小字領域のうち、山際の国道 105 号線と阿仁川に挟まれた地域に集落がある。南北を貫く国道 105 号線の東に並行する道路沿いに展開する、縦状の集落でかなり小規模である。

・山際と河川が近く、集落内に水田開発を行える余剰地は少ない。2020 年 10 月 9 日時点で撮影された Google Earth 上では笑内駅の東側で水田開発を行なっている様子が確認できるが、実地調査を行なった 2021 年 11 月 7 日時点では背丈以上の植物が生い茂った耕作放棄地であった。また水路は、笑内駅以南に、西の山側から集落を横断し阿仁川に流れ込むように何本か通っており、道路沿いと水路沿いの二つの原理から住宅が配置されている。

・小字内に寺はなく、墓地も集落中央部の阿仁川側に一箇所のみ独立してある。

・神社は、縦に広がる集落の中央部よりやや北に山を背にした笑内神社がある。神社は集落の中でも一段高い位置にあり、鳥居の前は広場になっている。

・集落内の主要な公共建築物は、小字領域のやや北部に位置する秋田内陸線笑内駅のみである。

【建築】

〈耕配置と屋根形式〉〈母屋と付属屋の関係〉

・敷地が広く古くからあるであろう住宅は、唯一秋田内陸線の東側に位置する 2 軒で、母屋は長手方向の平入形式で玄関部の下屋のみ妻入り屋根になっている二階建てであった。道路沿いに庭を持ち、母屋は道路からセットバックした配置とで周囲には複数の付属屋がある。

・しかし、比較的新しい住宅も敷地が広いものが多い。様々な屋根の形式が見られるが、母屋が片流れのものはほとんど見られず、二階建て大屋根妻入りのものが多く見られた。母屋の横や手前に耕作地（畑）を構えているものが多いが、特に大きな住宅は、公道との境界に擁壁を設け一段高いところに母屋・付属屋・庭を構えている。

・また、多くの住宅が倉庫やなどの付属屋を母屋の手前または横に持っており、その屋根の形式は片流れが多かった。

〈基礎・構造的特徴〉

・比較的新しい住宅は、一階がＲＣ造の車庫や倉庫で、二階以上が居住域になっているものが多い。またその中でも特に大きいものは、公道との境界に擁壁を設け一段高いところに母屋・付属屋・庭を構えている。

・また、道路の東側は阿仁川に向けて傾斜しているため路面がＧＬより高く、道路に面した建築は深基礎仕様となっていた。

〈外壁・意匠的特徴〉

・付属屋の多くは、亜鉛メッキ板製の簡素な作りで装飾的要素は見られなかった。しかし、一部では土蔵の観音扉を模した装飾が施されたＲＣ造の倉庫も見られた。

・母屋に関しては、古くからの２軒の住宅と新しい住宅の一部で、白い破風面に黒い束と貫の木材を表出させて意匠的に見せているものが確認できた。その他の住宅も、木板を外壁材に用いたりと簡素なものではなく、新築あるいは管理修繕が行き届いている印象であった。

【構築物】
〈雪の仕舞い方〉
・積雪対策を徹底している。植栽（低木）には、覆うような自作の木製の雪除けが設置されていた。
・また、一階サッシ部に複数の木板をはめて、積雪によって窓ガラスが割れることを防ぐ機構が備えられている。11 月 8 日時点では一部の住宅の北側サッシでは最大まで板がはめられているものも見られた。
・集落の公共物である消火栓は、集落の主要道路沿いでは、合掌型で亜鉛めっき鋼板製の施工精度の高い雪除けが見られた。しかし、国道 105 号線のすぐ東を並行する集落の副動線沿いでは雪除けが設置されていなかった。また共同のゴミ置き場も、金網製の既製品に加工したブルーシートを側面に張り隙間を埋めるような工夫が見られた。

【材料まとめ】
・付属屋は全体的に比較的簡素な作り。母屋は手の混んでいるものが多い。
・ガルバリウム鋼板
・木板
・亜鉛めっき鋼板（トタン）
・樹脂製の波板
・ブルーシート

2-6.根子

2-6-1. 集落概要

森吉山の東方、根子川と南方から流れる支流の合流する地点の、盆地状の地形に立地する。盆地の中央部に集落と畑が、周辺部に棚田がある。また支流の上流部に飛び地の小規模な田がある。水については根子川と支流の上流から引水し、田を通って集落に供給する。阿仁川周辺との交通路はかつて根子川沿いの山道であったが、現在は東西に根子トンネルがあり、笑内と接続している。

図 24 根子の地形(左)、根子の地形拡大（右）

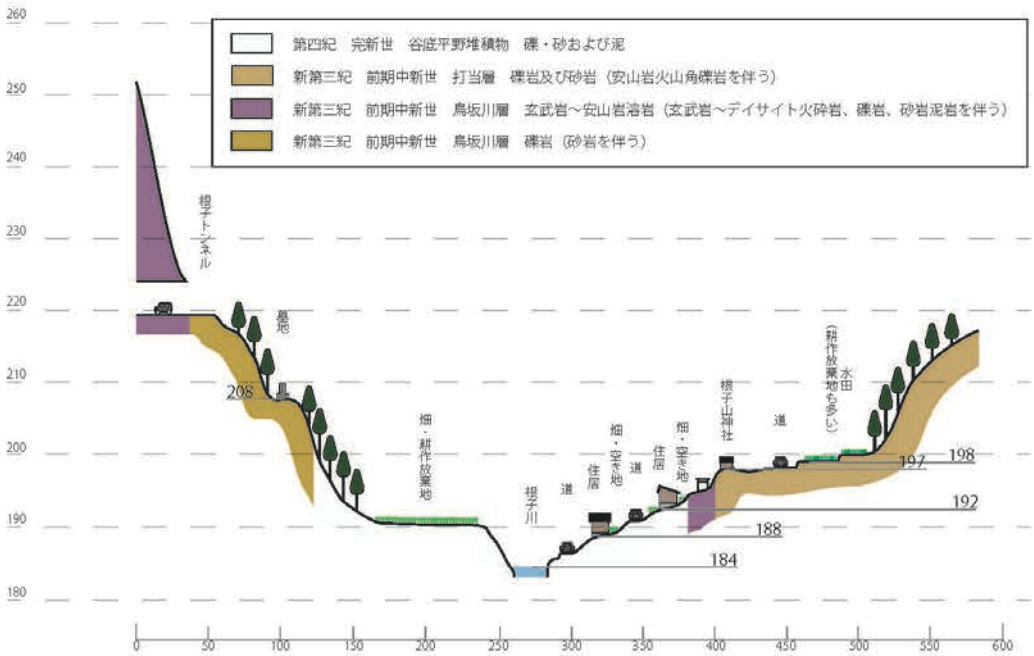


図 25 断面図_根子

2-6-2. 地質・地形・水利・自然災害

図 26 航空写真（左)、地形図（中)、地質図（右）

根子は堆積岩の上に位置し、集落の輪郭は堆積岩と火成岩の境界とほぼ一致する。集落は山地中に斜度 20 度以下斜面の非火山性山地に立地して、周りは基本的に最大斜度 40 度以上の非火山性山地に囲まれて盆地となっている。集落主体は緩い斜面（3 度以下）と斜度 20 度以下の山地と隣接するところに集中する。

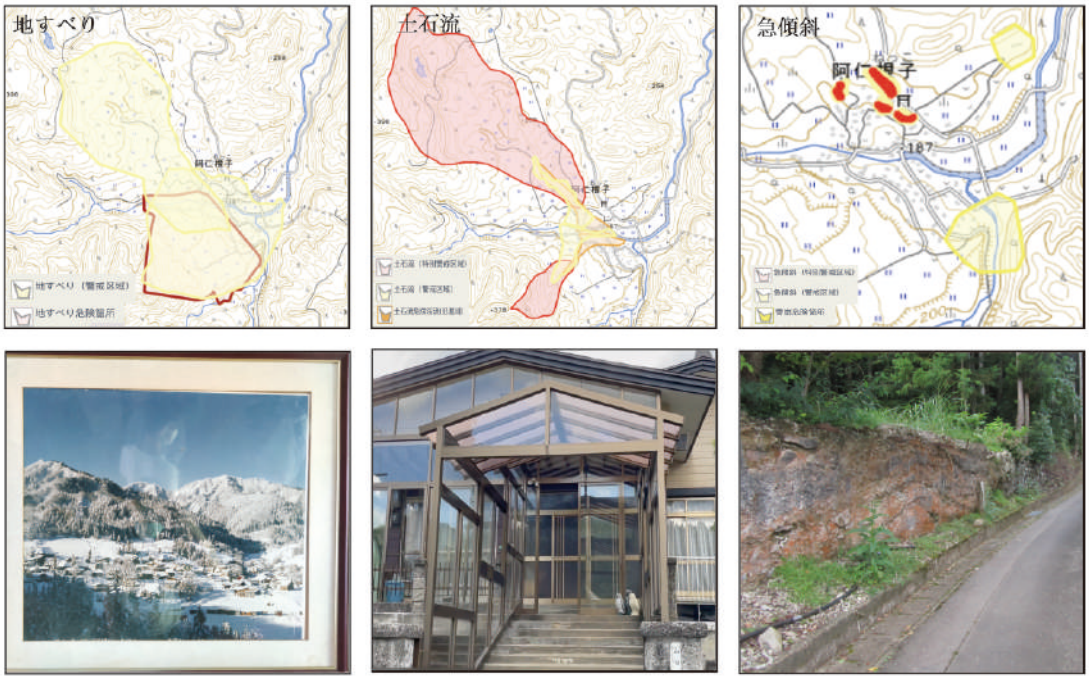


図 27 自然災害

根子の自然災害は地すべり、土石流、雪崩の 3 種類があって、その中、地すべりの影響範囲が最も広い。根子地区の土砂災害ハザードマップから、集落全体は基本的に土砂災害警戒区域であり、地すべりが発生する時、集落の大半部分が被害を受ける可能性があると示している。その他、土石流と雪崩はあるが、警戒範囲は小さい、及び住居密集のところと一定の距離を保つため、住居と住民に大きな被害を与えないと考えられる。

2-6-3. 地域経営（産業・生業）

本項は、第 1 回調査 2 日目（2021 年 9 月 2 日）に行った山田博康氏へのヒアリングと、山田氏による村の案内を元に記述した。

【稲作】

盆地の縁に棚田がある。現在の形に整理されたのは 50 年ほど前であり、その時には水利も再設計された。

棚田の中には、現在は使われていないものの、棚の形や水路は維持されいつでも再び耕作できるようになっているものがある（図 6）。これらの棚田は景観のために、1 丹あたり 2 万円もらって維持している。

山奥に入ったところには、打ち捨てられた棚田がある（図 7）。稲作の効率化、生産調整、高齢化とともに、1965 年頃から山奥の棚田が減少し始めた。

図 28 景観のために維持されている棚田(左)、放棄された棚田（右）

【畑作】

盆地の底には住居とともに、畑がある（図 23）。

図 29 家と畑

【林業】

農業と合わせて林業が現在の生業の基本になっている。

【マタギ・行商】

根子のマタギは盛んに行商（売薬）を行い、毎年冬に 2 か月ほど、薬草や熊の胆嚢、胃腸薬や婦人薬を売り歩いた。山田氏の父の代では、北は北海道の西海岸、南は岐阜まで赴き、富山の薬売りとの接触もあったと考えられる。各地で得た情報は、商売において何に投資すると儲かるのかを考える手助けになった。最盛期は村の半分の人が製薬に関わっており、主に農閑期に薬草を取ったり、加工したりした。薬事法の成立により民間薬の売買が不可能になったため、明治 16 年に秋田県製薬会社が設立された。

60 年ほど前まではマタギがいた。マタギは血族結合であり、長男にしか教えなかった。人数は確定できないが、10 人ほどだった。

【鉱山】

終戦直後には炭鉱が存在した。昭和 36-37 年頃に閉山した。現在の児童館の裏の辺りに、平屋の炭鉱住宅が 3-4 軒ほど、さらに鍛冶屋、製材所、共同浴場があった。

2-6-4. 信仰

観世音を祀る根子神社、マタギに関連した山岳信仰の根子山神社が見られた。根子神社は山の麓の水源のあった土地に鎮座し、集落の人々に観音様として親しまれるが、現地の説明書きには少彦名を祀ると記載がある。集落の中心近くにある小高い山の上に根子山神社が建てられている。

また現在阿仁川から集落内へはトンネルが開通しているが、それ以前に利用されていた未舗装の旧道では鳥居が確認された。

図 30 根子山神社(左)、旧道の鳥居（右）

2-6-5. 建築・集落構造

【集落構造】

・大字領域は広く周辺の山林を含むが、居住域は阿仁根子根子又の 1 箇所に集中しており、盆地の低地部、根子川に沿うような形で分布している。居住域内の道は微細な高低差に沿って曲がりくねっている。

・盆地の中でも標高の高い位置、集落の縁に居住域を囲むように棚田がある。しかし現在は、休耕地となっているものも多い。また、阿仁根子根子又の南端の字界からさらに南に備前ノ又川に沿って 500m 程進んだ山合に、うち捨てられた棚田がある。（詳細は産業【稲作】の欄を参照）

・小字内に寺はない。墓は盆地の東端、根子トンネル入り口付近から一段低くなった位置にまとまっている。

・神社は居住域の北端の小高い丘の上に位置する根子山神社と、さらに北側の盆地の縁に位置する根子神社の二社である。

・集落内の主要な公共建築物には、集落の西端に位置する根子児童館と集落北東の高台に位置する根子番楽伝承館がある。伝承館は平成 10 年に阿仁合小学校に統合され閉校した旧根子小学校を転用したものである。かつての校庭には県指定有形文化財「魚形文刻石（通称サケ石)」がある。

・居住域の西端、根烈には、かつての炭坑および炭坑住宅の跡地がある。（詳細は産業【鉱

山】の欄を参照）
・根子川と備前ノ又川の合流地点に「二又荘」という築 120 年ほどの古民家がある。

【建築】
〈耕配置と屋根形式〉〈母屋と付属屋の関係〉
・道が曲がりくねっているためか、道に対して平入りか妻入りかは住居によって異なり、傾向がつかめない。屋根形状は切妻、片流れ、招き屋根などのものがある。畑などの余剰地がある場合は、玄関が道に対して水平方向に設けられているものもある。いずれの場合も屋根形状は耕作地や空き地がある方向に向かって落雪されるように計画されたものと考えられる。
・道に面して住居があり、その裏手側や横に耕作地（主に畑）や空き地を持つ家が多い。
・倉庫、車庫などの付属屋を住居の隣、もしくは手前に母屋とは独立して持つ家が多い。これらの付属屋は片流れや招き屋根で、基礎がない。
・玄関が付属屋の様に前面に飛び出した形をしているものが多く見られる。住居と一体に設計されたものもあるが、木製の枠組に樹脂製の波板や亜鉛めっき鋼板が貼ってあるような、後から住民自身が取り付けたと思われるものも多く散見された。
〈基礎・構造的特徴〉
・根子川付近の低地など比較的平坦な土地にある住居は、高基礎や 1 階部分が車庫や倉庫になっているものが多く、これらの形式を持つ住居は玄関が 2 階部分に付いている。高基礎仕様ものは基礎を延長したコンクリート壁の階を含めて 3 階建て、それ以外のものは 2 階建てが多い。
・盆地状の地形であるため、特に川沿いから離れた位置にある住居は、道との高低差が大きく、深基礎仕様または盛土などによって敷地全体が持ち上げられている住居が多い。
〈外壁・意匠的特徴〉
・ 全体的に比較的簡素な作りで装飾的要素は見られなかった。母屋はガルバリウム鋼板を用いた外壁がほとんどで、商店や倉庫などの簡易的な建物では亜鉛めっき鋼板を用いたものも散見された。
・白い破風面に黒い塚と貫の木材を表出させた意匠が見られる特徴的な住居が児童館を含めて数軒確認できた。
【構築物】
〈雪の仕舞い方〉
・根子を訪れたのは 9 月であったため、積雪対策については調査不足であることを先に断っておく。不足分は Google Map のストリートビュー機能を活用して補完する。
・高基礎仕様の 1 階部分などの窓には、サッシの外側に木板をはめて、積雪による窓ガラスの破損を防ぐ機構が見られる。立てかけるタイプの雪除けと見られる木製の構築物も一部見られた。

・集落の公共物である消火栓には、木材と亜鉛めっき鋼板を組み合わせて製作された、陸屋根の設置型雪除けが見られた。また共同のゴミ置き場は、屋根が亜鉛メッキ銅板の片流れ屋根となっており、金網製の既製品に亜鉛めっき鋼板を用いて補強されているものもあった。

【材料まとめ】
・全体的に比較的簡素な作り
・ガルバリウム鋼板
・亜鉛めっき鋼板（トタン）
・樹脂製の波板

2-7.粕内

2-7-1. 集落概要

森吉山の西方、南から流れる阿仁川と東から流れる荒瀬川の合流する地点にあたる。西から秋田内陸線、国道、旧道の順で南北に走っており、旧道沿いに集落が存在する。家屋間に空き地がほぼ等間隔で存在する。平野西側は田、東側の山際は畑として利用されている。

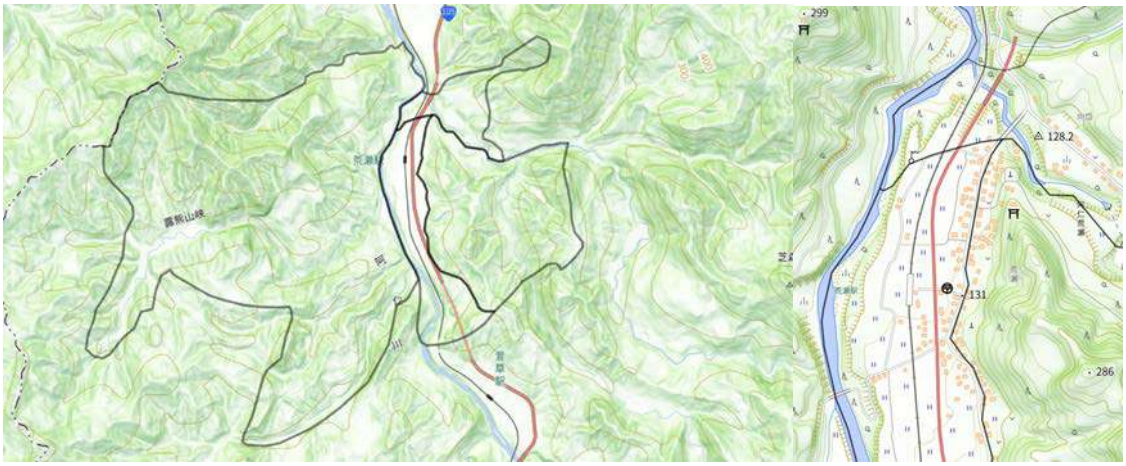
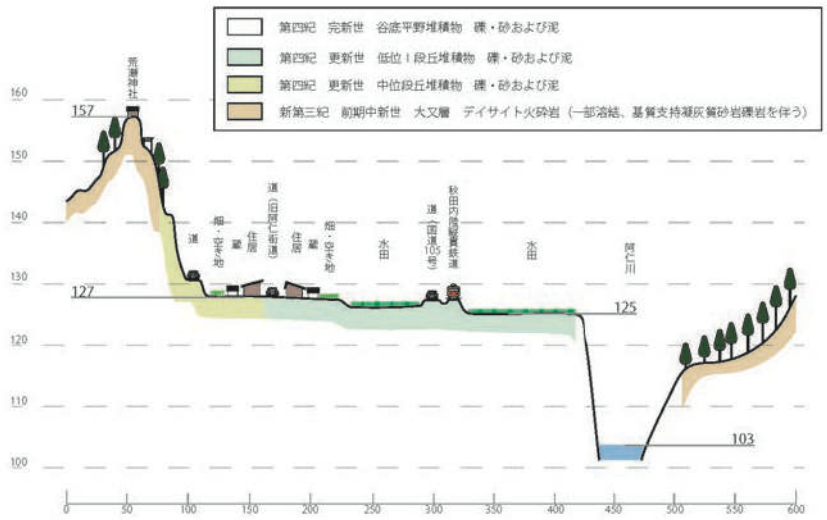


図 31 粕内の地形



＊断面図の標高、スケールについては地理院地図（https://maps.gsi.go.jp/）を元に作成。単位は全て [m]

図 32 断面図_粕内

2-7-2. 地質・地形・水利・自然災害

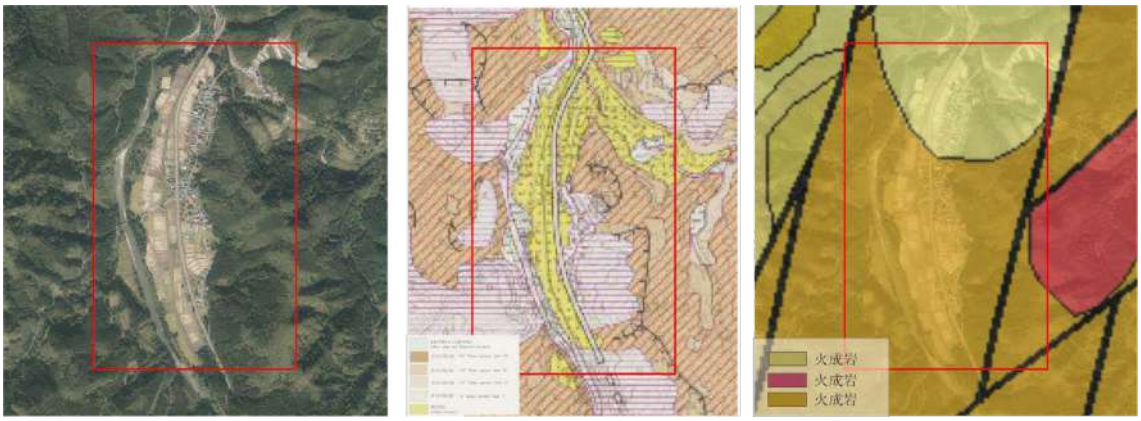


図 33 航空写真(左)、地形図（中)、地質図（右）

粕内は火成岩の上に位置し、近隣には森吉山という火山が存在している。集落は基本的に川沿いの段丘上に立地し、周りは非火山性山地に囲まれている。住居密集地の東側は斜度 40 度以上の山地と隣接し、他は主に緩い斜面（斜度 15 度以下）である。

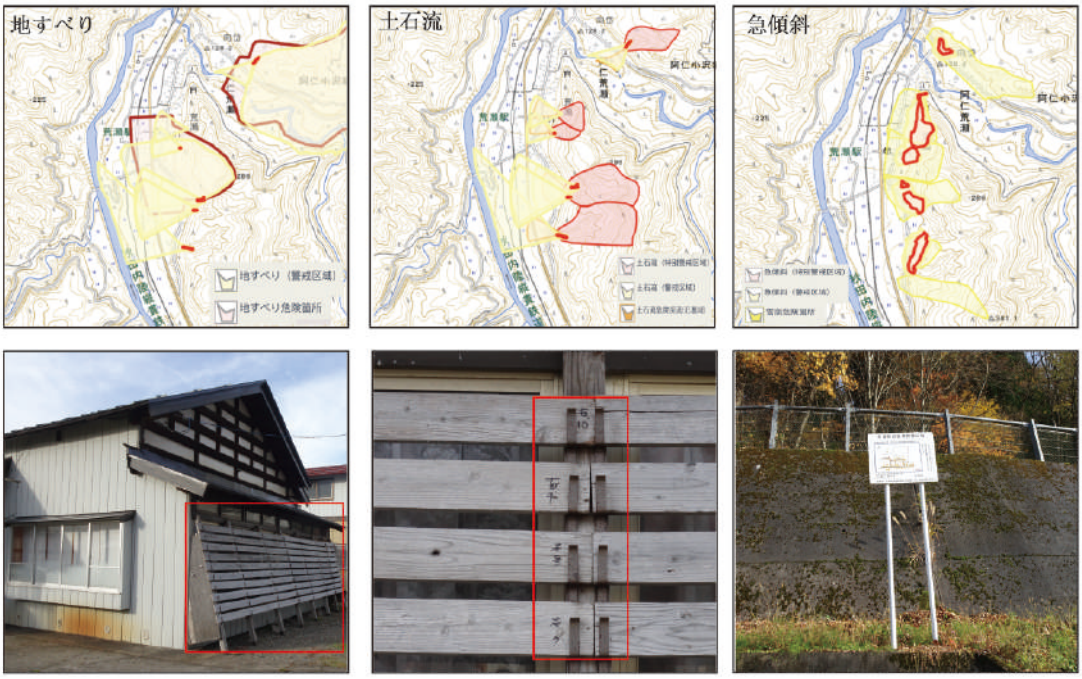


図 34 自然災害

粕内では、山に近いことから集落内で地すべりや土石流が発生することがある。上述の 2 つの自然災害の発生を防ぐために、集落の中でコンクリートの壁が作られている。しかし、大雨や大雪、台風などの際には地すべりと土石流の災害の危険性があると考えられる。また、大雪の影響から、民家の一階の窓は木の板で保護されている。板には番号が記されており、毎年再利用されているように考えられる。現地調査から、粕内の人々は自然災害を避けるために、建物だけでなく、山の段丘の基礎部分も守ってきたと考えられる。

2-7-3. 地域経営（産業・生業）

【産業】

産業は主に農業である。川沿いの低位段丘上に大規模な水田があり、住居と同じく線状で展開する。家の近くに坪庭のようなサイズの畑を持つ。

図 35　粕内大規模な水田

2-7-4. 信仰

集落に近い山の尾根上に荒瀬神社が鎮座する。社殿は山の麓に背を向けるように建てられ、集落から境内へ向かう参道は社殿脇へ繋がっていた。境内には荒瀬神社の他に石碑や石仏が複数見られた

図 36 荒瀬神社と石碑

2-7-5. 建築・集落構造

【集落構造】

- 粕内小字域内ではなく、荒瀬駅東側の阿仁川と山際に挟まれた地域（段ノ上）に主な集落がある。南北を貫く国道 105 号線と山際の間にある道路沿いに展開する路村である。国道 105 号線以東の山際に住居がまとまってあるが、山を背にした配置ではなく二重になっているため路村的である。またトンネルを抜けた南部にも集落（十二沢・水上口・マタ沢からなる）があるが、本調査で詳細を確認できなかったことと、小規模かつ段ノ上と連続していないため分析は割愛する。
- 国道 105 号線と阿仁川の間（中野・樋ノ沢）や、一部路村の裏に当たる箇所などの大規模な余剰地を利用して水田開発を行なっている。また水路は、東の山側から集落を横断し阿仁川に流れ込むように数本通っている。
- 路村だが母屋同士の間隔は最密ではなく、所々一件分ほどの余剰地が設けられている。この余剰地は耕作地や庭として活用はされておらず、純粋な空き地であり所有関係も不明である。冬季の積雪を捨てる集落の共有空間ではないかと考えられる。
- 集落内に寺はなく、墓地は段ノ上北部の高い位置に独立してある。この立地は、路村が背にする山の稜線の先端を均した場所にあたる。
- 神社は、墓地の南側のさらに高い稜線の先端に荒瀬神社がある。墓地方面から神社の裏側にアクセスすること可能だが、鳥居と神社の向きから正当なアクセス方法は集落内の私有地を通って山際を北上しながらなぞるような動線であった。
- 公共施設は、領域中央部に位置する秋田内陸線荒瀬駅と、国道と集落内を結ぶ東西の街路沿いに郵便局がある。
- 商業施設は、国道 105 号線沿いのマタギナガサ製作所、集落内の街路の結節点に酒屋がある。

【建築】

〈雪対策〉

- また、一階サッシ部に複数の木板をはめて、積雪によって窓ガラスが割れることを防ぐ機構が備えられている。11 月 8 日時点で、一部の住宅で番号の振られた板がはめられているものが見られた。
- 農業用ビニールハウスの架構にブルーシートを張ったものを車庫として利用している住宅も見られた。
- 集落の公共物である消火栓は、雪除けが設置されていなかった。共同のゴミ置き場は、金網製の既製品に加工した樹脂製の波板を全面に張り隙間を埋めるような工夫が見られた。

〈神社〉

- 本殿の中は直近で使用された形跡があり、本殿正面上部のドラの横に海亀の剥製が飾られていた。また、神輿を収納する倉庫や神具・賽銭箱の飾られている小屋も境内にあった。小屋内の地蔵は、人の形を模して石を積んだだけのものだった。

〈耕配置と屋根形式〉〈母屋と付属屋の関係〉

- 陸屋根、片流れ屋根、腰折れ屋根、招き屋根、切妻屋根など様々な屋根の形式が見られる（ため傾向として的確に類型化することは難しい。）
- 改装はされているものの比較的古く大きな住宅の母屋は、二階建て切妻屋根の妻入りが多い。特に南部は、道路際の二階建て大屋根妻入り。北部では、公道との境界に塀や生垣を設け母屋の前方に庭を持った二階建て複雑な下屋の付属した切妻屋根。中央部の棲み分けは、北部と南部の傾向が入り混じっていた。
- 比較的新しく大きな住宅は、主に中央部の山際側と国道105号線沿いで見られた。その母屋の形式は、道路際に建てられた一階がＲＣ造の車庫や倉庫、二階以上が居住域になっている招き屋根もしくは片流れ屋根である。これらは道路に対して、招き屋根の場合は屋根勾配が強い平側、片流れの場合は平面の裏側が面している。母屋の裏に耕作地を構え、母屋は二階玄関部に正面からアクセスする階段の幅だけ道路からセットバックした配置となっている。
- 大きな住宅以外は、二階建ての片流れ腰折れ屋根か短手方向に妻入りの形式の簡素なものが多い。片流れ屋根の住宅に関しては、道路に対して平面の裏側が面している。具体的にこの簡素な母屋は、半反の短手と同程度の敷地幅で道路に面していることがGoogle Earthの航空写真よりわかった。一方で集落北部の、裏に水田を持つ大きな住宅は、一反の短手と同程度の敷地幅で道路に面していることもわかった。
- 大小関わらず路村の中で水田側の住宅の多くが、車庫を母屋の横、倉庫や蔵などの付属屋を母屋の裏に耕地を挟んで持っていた。その屋根の形式は片流れ・切妻と様々だった。一方で、山際側の住宅の多くは付属屋を母屋の横か裏に持っていた。

〈基礎・構造的特徴〉

- 比較的新しい招き屋根もしくは片流れ屋根の住宅は、一階がＲＣ造の車庫や倉庫で、二階以上が居住域になっているものが多い。しかし、他の住宅では一階床高をＧＬより高くする工夫はあまり見られなかった。

〈外壁・意匠的特徴〉

- 付属屋の多くは、亜鉛メッキ板製の簡素な作りで装飾的要素は見られなかった。
- 母屋に関しては、改装・新築されたものと亜鉛メッキ板製の簡素な作りのものの集落内での割合は同程度であった。しかし、短手方向に妻入りの住宅の一部で、側面は亜鉛メッキ板製だが、正面は白い破風面に黒い束と貫の木材を表出させて意匠的に見せているものが確認できた。

【材料まとめ】

- 付属屋は全体的に比較的簡素な作り。母屋も新しいものは綺麗だが、装飾的というわけではなく全体的に質素。
- ガルバリウム鋼板
- 亜鉛めっき鋼板（トタン）
- 樹脂製の波板
- ブルーシート

2-8.阿仁合

2-8-1. 集落概要

森吉山の西方、阿仁川が南から流れ、阿仁川東部に平野がある。断面的には、阿仁川の方から３段の段丘があり、１段目は畑、２段目は鉄道、街道とそれに沿った集落がある。３段目には集落と寺社、さらに隣接する山間部斜面に山神社がある。

図 37 阿仁合の地形

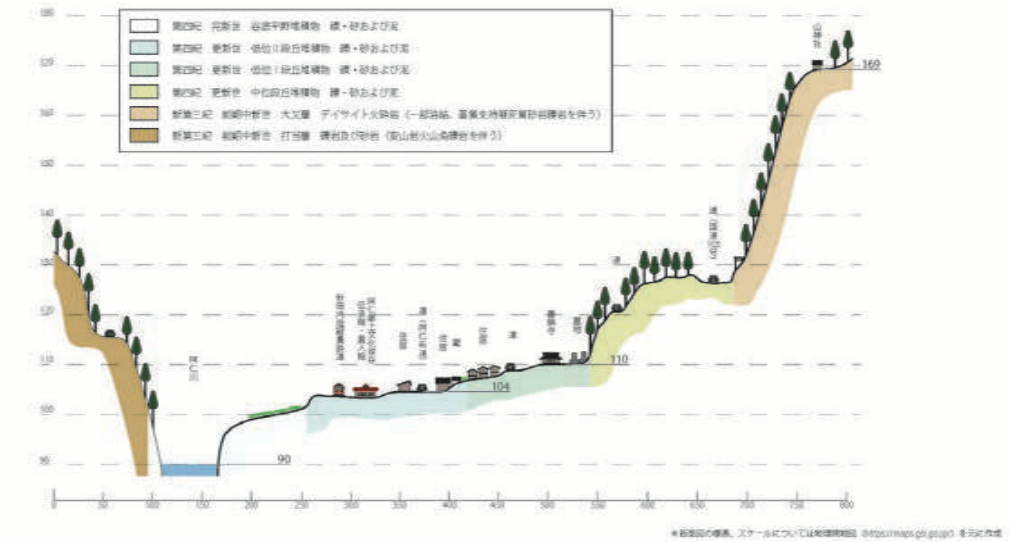


図 38 断面図_阿仁合

2-8-2. 地質・地形・水利・自然災害

図 39 航空写真、地形図、地質図

阿仁合は火成岩上に位置する。阿仁銀山は主に川沿いの谷底平野と段丘で、湯口内は段丘上に立地している。周辺は非火山性山地に囲まれ、西側の緩い斜面（斜度 15 度以下）と東北側の丘陵（起伏量 200-100m）以外、他は基本的に中起伏山地である。

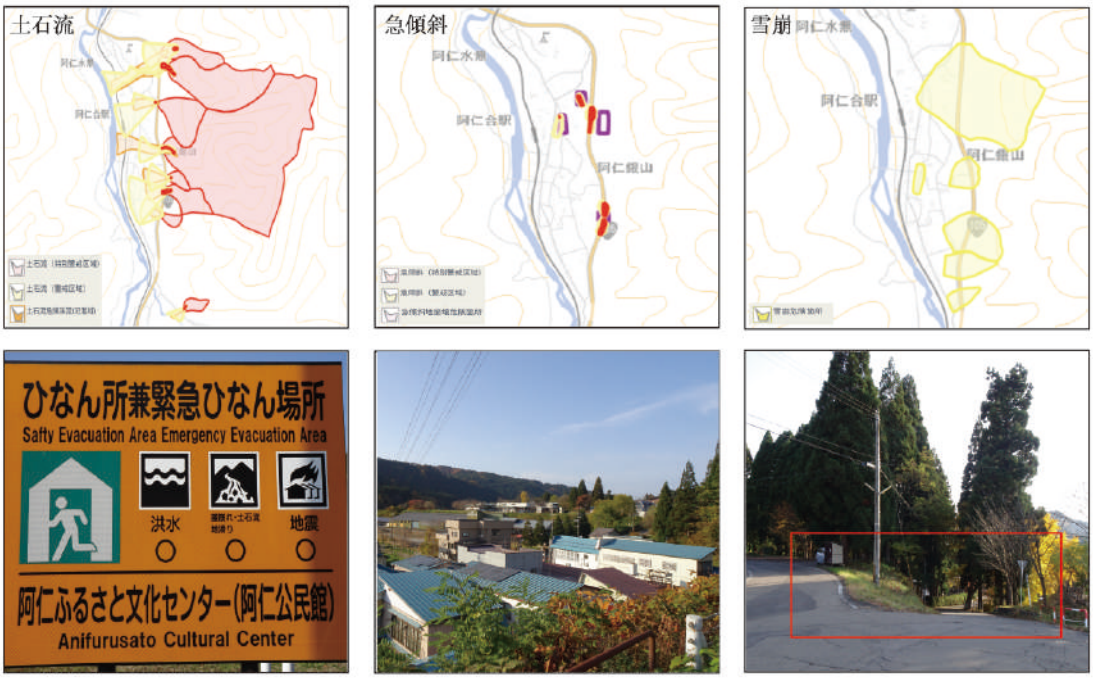


図 40 自然災害

調査によって、阿仁公民館と阿仁小学校は阿仁川上流の集落が唯一の避難場所であることが確認された。自然災害が発生すれば、二つの場所は阿仁合の周辺集落の避難地である。阿仁合の居住域は、いくつか段丘上に位置しており、その配置や道路の分岐点などから、地形の段差の変化が理解できる。 山に近い部分では土石流が発生する可能性があり、また、急

傾斜地の危険もある。 雪崩は主な自然災害の一つでありる。

2-8-3. 地域経営（産業・生業）

主に鉱業と関連する加工業、運送業、商業などがある。

阿仁鉱山の開発に伴って、鉱山に働く者以外、鉱山外の運送従事者と、その他鉱山労働者などを相手にする諸商売の者が多く集まったと言われ、米代川から阿仁川への最終船着場でもあったので、運送業と商業が発達したと考えられる。

アドルフ・メッケルの鉱山改革によって、近代では精錬所や機械工場が阿仁合に集中しており、工業町として活躍した。

図 41 阿仁異人館

鉱山で栄えた往時の町の姿を現在に伝える当地で残された建物は宮越家住宅（旧宮越商店）と旧阿仁鉱山外国人官舎がある。現在では中心街に多くの商店が見られ、耕作地はほとんどない。西岸の湯口内にしか川沿いに水田が見られる。

図 42　商店街の様子（左)、宮越家住宅　（右）

2-8-4. 信仰

集落内に鎮座する水無神明社では、社殿の基礎に金属精製の際発生した不純物である鍰（からみ）が用いられ、鉱山との関係が伺えた。境内の石碑には庚申信仰や太平山信仰、金毘羅信仰が見られる。

また郷土文化保存伝承館の付近には同じく金毘羅大権現の石碑が設置されている。これは海上安全の神として鉱石の輸送に用いる船の安全を祈ったもので、ニノ又鉱山が古くから信仰したとされる。

図 43 水無神社

集落の東側、山中の高い位置には山神社が鎮座。その他に GoogleMap では稲荷社、愛宕神社２社、神明社、弁財天、今木神社が確認された。

また集落内には宗派の異なる仏教寺院が５つ存在し、阿仁銀山開発の際に出身地の寺院から信仰を持ってきた者が複数いたためとされる。

図 44 山神社入り口

2-8-5. 建築・集落構造

【集落構造】

- 阿仁銀山と阿仁水無の小字領域が隣接しているため、一つの大規模な集落と捉えてまとめる。また調査では、阿仁町町役場で勤務されていた戸嶋喬さんと、宮越商店の所有者である宮越雅一さんへのヒアリング及び商店の見学を行ったためその内容も踏まえてまとめる。
- 西側の緩やかに流路を曲げる阿仁川と、東側の複雑な丘陵帯に挟まれた縦長の地域(阿仁銀山・阿仁水無）に集落がある。河岸には桜が植えられた散歩道や公園があり、自然堤防上には秋田内陸線の線路が通っている。主な集落構造は、曲線を描く自然堤防に沿うような５本の直線的な路村（新町・大町・下新町・上新町・畑町）の連続である。特に下新町の北秋田市役所阿仁庁舎前は、商店街特有の街頭や旅館･商店が見られるため、街路村的な側面も見える。 かなり建築同士の密度が高く、特に下新町は建物同士が隣接している。
- また、この主要な街路に面さないその他の住宅は、複雑な丘陵帯を埋めるように緩やかな斜面地に立地している。それらの集落構造は主に立地によって二種類に分類される。大町の、東の丘陵帯に刺さるような東西に展開する路村的構造。集落南部の畑町東裏などの、丘陵帯に背を向けるように配置された構造である。路村だが母屋同士の間隔は最密ではなく、所々一件分ほどの余剰地が設けられている。この余剰地は耕作地や庭として活用はされておらず、純粋な空き地であり所有関係も不明である。冬季の積雪を捨てる集落の共有空間ではないかと考えられる。
- 集落南部の一本の路村（畑町）と国道 105 号線に挟まれた余剰地を除いて、集落内に大規模な余剰地はなく水田開発は行なれていない。また水路は「滝ノ沢川」と呼称される１本を含め、阿仁合駅を南北で挟む２本が東の山側から集落を横断し阿仁川に流れ込むように通っている。
- 小字内に宗派の異なる寺が５軒あり、それぞれが墓地を持っている。様々な宗派の寺の存在は、鉱業が盛んであった頃に阿仁合に全国から人が集まって来たことに起因する。専念寺のみ自然堤防沿いにあり、その他の寺は複雑な丘陵帯を埋めるように緩やかな斜面地に立地している。
- 神社は、Google Earth の航空写真で確認できるだけで８社ある。ヒアリング（戸嶋さん）により、鉱業によって栄えた集落であるがゆえマタギとはまた異なる山神を集落内に祀っていたことがわかった。また、現在は国道 105 号線の東の山の中に位置する山神社は、大正 6 年時点では集落内にあったが消失したため火災の被害にあわないように移動したとされる。
- 公共施設・商業施設が多いため、主要なものを抽出してまとめる。市役所庁舎、公立小学校、公立中学校、市立体育館・グラウンド、郵便局、公民館、公園などの公共施設。旅館、呉服屋、酒屋、美容院、畳販売店、銀行などの商業施設。阿仁郷土文化保存伝承

館・異人館、内陸線資料館などの文化施設。自動車整備工場、食品加工工場などの工場。

【建築】

〈耕配置と屋根形式〉〈母屋と付属屋の関係〉

- 明治時代に建設された集落内で最も古い住宅（宮越商店）が、大町の路村の一角に位置する。正面は 21m で道路際に面し、奥行きは 26m ある非常に大きな住宅である。母屋は巨大な破風を持つ妻入り形式の二階建てで、玄関部前方に裳階のようなものを持っている。元々一階には呉服屋などが入った商店で、裳階空間は冬季でも積雪の影響を受けずに営業ができるように設けられている。敷地内に母屋の北側平面に正面を向ける付属屋（蔵）があり、現在は改装され母屋から外に出ることなく直接アクセスすることが可能である。その他にも敷地には複数の付属屋や、離れのような小規模の母屋も確認できた。敷地内に耕作地は持っていない。
- 陸屋根、片流れ屋根、招き屋根、切妻屋根など様々な屋根の形式が見られるため傾向として的確に類型化することは難しい。
- まずは、路村（新町・大町・下新町・上新町・畑町）によく見られる建築の傾向をまとめる。建設年代は、住宅兼商店のものは比較的古く個性的だが、住宅機能のみのものは比較的新しかった。
- 駅前の中心街から遠のくにつれ既に廃業しているものも多いが、集落中央部の路村（大町・下新町・上新町）は、短手正面に看板を持つ住宅兼商店が散見される。この住宅は、二階建ての片流れ大屋根か短手方向に妻入りの形式のものが多い。片流れ屋根の住宅に関しては、道路に対して平面の裏側が面している。いずれも道路側は商業機能を持った二階建てだが、道路に対して奥方向は平屋になっている。また、主要な街路に対して水路や道路が交わる結節点では、正面を二面持っている住宅も一部見られた。これらの屋根形式は、正方形のプランの陸屋根であったり、二つの長手方向に切妻平入の母屋が複雑に接続しているものであった。
- その他、商業機能を持っていない路村の住宅は、二階建ての招き屋根もしくは片流れ屋根のものが多い傾向にある。これらは道路に対して、招き屋根の場合は屋根勾配が強い平側、片流れの場合は平面の裏側が面している。
- 大小関わらず路村の中で特に商店兼住宅、または中心街付近の住宅の多くは、独立した付属屋と耕作地を持っていない。一方、中心街から遠のくにつれ（新町・畑町）母屋の横や裏に耕作地と付属屋を持っており、その屋根の形式は片流れ・切妻と様々だった。
- 次に、路村に属さない住宅によく見られる建築の傾向をまとめる。建設年代は、路村の商業機能を持たない住宅と比較すると古いが、宮越商店よりは大分新しいと考えられる。
- 平屋は切妻屋根の妻入りが多いが、二階建てのものは片流れ屋根、招き屋根、切妻屋

根など様々な屋根の形式が見られるため傾向として的確に類型化することは難しい。また上岱の一部では、同規格のモデルハウスが６軒建てられている場所もあった。

・　路村に属さない住宅の多くは、母屋の横や裏に耕作地と付属屋を持っており、その屋根の形式は片流れ・切妻と様々だった。

〈基礎・構造的特徴〉

・　基本的に、基礎高は一般的で一階床高をＧＬより高くする工夫はあまり見られなかった。

・　一方で集落内で最も古い木造住宅（宮越商店）に関しては、公道との境界に高さ 60cm ほどの石垣をの基礎を設けている。また石垣は乱積みされていた。

〈外壁・意匠的特徴〉

・　付属屋の多くは、亜鉛メッキ板製の簡素な作りで装飾的要素は見られなかった。しかし、古い住宅（宮越商店）の蔵は土蔵で左官仕上げの施された立派なものであった。

・　また母屋に関しては、まず最も特徴的であった宮越商店の詳細をまとめる。正面一階は一面に裳階があり、ガラス戸で閉じられている。玄関入り口は切妻屋根の妻入りになっているが、シンメトリーではなく正面に対して左側に寄っている。また裳階内空間は半屋外の商店機能を持つため、住宅壁面が上方向に開きカウンターのようになる機構が確認できた。銅山の名残からか、ベンガラが塗られた梁などもあった。次に正面二階は、横幅いっぱいに装飾されたガラスの水平連続窓があり、その両端に突出した戸袋を持っている。その窓に対して片流れの下屋がかかっており、その上面は破風となっている。破風は、白い破風面に黒い束と貫の木材を表出させた意匠と、先端を銅板で覆った３本の小屋梁を突出させた意匠が見られた。見学した内部に関しては、一階に商店スペースや複数の客間、二階に使用人部屋や複数の居室・客室があった。特に二階の和室は周囲に回廊を巡らせた居室になっており、長手側の廊下には正面から確認できる水平連続窓があった。また、一部の階段は擬洋風的な装飾が施されているなど非常に手の込んだ文化的価値のある建築であると言える。また、宮越商店の南の交差点から国道 105 号線のやや内側に入った立地の古めの住宅も同系統のファサードデザインがされていた。しかし、相違点として宮越商店より小規模であること、破風の小屋梁の突出が一本であること、水平連続窓の両端に戸袋を持っていないこと、ガラスがに装飾がなく外壁材もガルバリウム鋼板であることなどがあげられる。

・　その他の、看板を持つ二階建ての商店建築の看板はＲＣ造だが、凹凸や装飾は少なくシンプルなものが多かった。また、二階正面に水平連続窓を持っているものが多く見られる。一方で看板を持たない小規模な理髪店では、正面ファサードいっぱいに複数のサッシを持っていた。その他にも、装飾が施された二階バルコニーの手すりの存在が確認できるなど、集落中心部は手の込んだ建築が多かった。

・　一方、集落中央部の路村に面する改装・新築されたもの以外の母屋に関しては、ガルバリウム鋼板・亜鉛メッキ板製の簡素な作りのものが多くみられた。

【構築物】

〈雪の仕舞い方〉

- また、一階サッシ部に複数の木板をはめて、積雪によって窓ガラスが割れることを防ぐ機構が備えられている。11 月 8 日時点で、一部の住宅で板がはめられているものが見られた。
- 農業用ビニールハウスの架構に防水カバーを張ったものを簡易的な倉庫として利用している住宅も見られた。
- 集落の公共物である消火栓は、雪除けが設置されていなかった。共同のゴミ置き場は、ほとんど金網製の既製品であったが、一部には加工した樹脂製の波板を張った工夫も見られた。

〈その他〉

- 鉱業が盛んだった頃、銅や銀を集落内で精製する際の不純物として、有害物質（カドミウム）が発生してしまう背景があった。そのため、それを川に流さないように廃材として固めてブロックとして転用した“鍰（からみ）”が多量に集落内で散見される。全て約 25×50×15（cm^3）角の規格で統一されており、利用方法はこの規格か、約 25×25×15（cm^3）角の半分に割ったものかであった。25×15 の一方の底面には、対角線の目地が確認できた。阿仁公民館前では無造作に積まれていたが、集落内では建材として有効活用されている事例が多々あった。例えば、水無神明社内の付属屋の基礎、異人館北東の住宅の擁壁及び階段、善導寺内の石畳及び墓石の囲い・基礎などである。非常に重く、墓地内の利用方法から素材としてヒエラルキーの高いものではないことが考えられる。
- また、明池山長福院内の灯籠はこの地域では採れない御影石でできていることが確認できた。これは阿仁銀山から関西へ、船を使い銅や銀を輸出する際に、帰りの船に乗せる重しとしてこの集落に輸入されたものである。

【材料まとめ】

- ガルバリウム鋼板
- 木板
- 銅
- ベンガラ
- 亜鉛めっき鋼板（トタン）
- 樹脂製の波板
- 防水シート
- 鍰
- 御影石

2-8.惣内

2-8-1. 集落概要

森吉山の北西方、南から流れる阿仁川と東から流れる小又川が合流して北流する地点にあたる。川の合流点を中心に平野が形成されている。川の合流点より北に 500m ほどに 50m*200mほどの細長い独立丘状の段丘がある。段丘は伸び、東側が阿仁川に突き出すように立地する。この段丘には中世城館や八幡神社がある。

図 45 打当内の地形

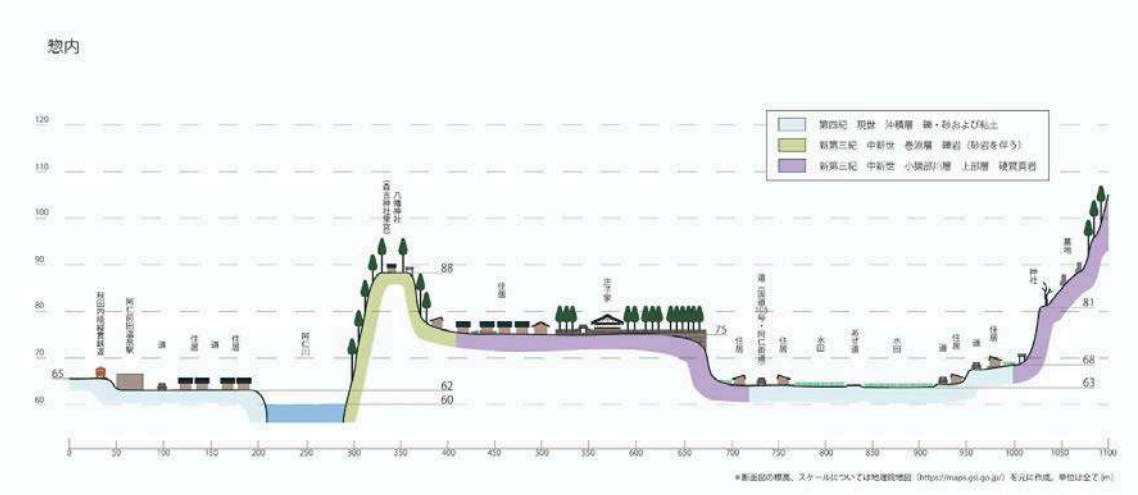


図 46 断面図_打当内

2-8-2. 地質・地形・水利・自然災害

図 47 航空写真、地形図、地質図

惣内は火成岩上に位置する。集落は砂礫段丘上に立地し、東側一部はやや高い段丘があって台地となっている。川に近いと川の中には沖積地がある。西側の方は丘陵地（起伏量 200-100m）と隣接する。

図 48 自然災害

惣内の地形は全体的に低いため、阿仁川に近い地域は大雨の危険性があると考えられる。山に近い地域は、地すべりや土石流の可能性がある。 また、独立丘上に八幡森遺跡（古代）・前田館遺跡（中世）が立地しており、その周辺は急傾斜の特別警戒区域である。積雪の影響から、建物の屋根は雪が抜けやすいように設計され、1 階の窓は板で覆われている。

2-8-3. 地域経営（産業・生業）

産業は主に農業である。台地の下は主に大規模な水田であり、台地上や尾根の近くは家に付随するように小規模な畑がある。

2-8-4. 信仰

集落から阿仁川に近い地域に森吉神社が鎮座。社殿の扁額には八幡神社との表記がある。大勢神社、稲荷神社、愛宕神社の境内社や神馬が祀られる。集落の山側に鳥居が見られたが、社殿は見られなかった。

図 49 八幡神社・集落の山側に鳥居

2-8-5. 建築・集落構造

【集落構造】

- 小字領域のうち、西側の山際と激しく流路を曲げる阿仁川に挟まれた地域に集落がある。居住域は小字内に満遍なく点在しているが、大まかに三つの立地的特性に分類できる。南北を貫く国道 105 号線（河辺阿仁線）沿いに展開する路村と、西側の山際を背に展開する集落と、阿仁川と国道 105 号線の間を埋めるように東西に伸びた台地上の集落（八幡森）である。基本的には後背湿地である余剰地を利用して大規模な水田開発を行なっている。水路は、圃場整備のされた水田の輪郭に張り巡らされている。
- 小字内に寺はなく、墓地は集落南部の山際と八幡森の東端の二箇所に独立してある。
- 神社は 3 社ある。その内 Google Earth の航空写真で確認できるものは 2 社で、一社は墓地近くの川側の神成神社、一社は八幡森の台地の中でも最も高い東端に川を背に立地する森吉神社里宮である。また、航空写真では確認できないが、八幡森台地の西方向への延長線の山際に神木を祀ったような神社があった。
- 公共施設・商業施設は居住域中央部に多かった、その内主要なものを抽出してまとめる。市役所庁舎、保育園、公立小学校、ホールなどの公共施設。葬儀場、コンビニ、ホームセンター、旅館、郵便局などの商業施設。自動車整備工場などの工場。

【建築】

〈耕配置と屋根形式〉〈母屋と付属屋の関係〉

- 集落内で最も古いであろう住宅が、八幡森内の路村の一角に位置する。敷地は約100m で道路際に面し、奥行きは 40m ある非常に大きな住宅である。母屋は、特徴的で巨大な破風を持つ平入り形式の二階建てで、玄関部は道路沿いではなく、瓦屋根の門をくぐった敷地内にある。母屋と付属屋の関係は確認できなかったが、航空写真から、敷地内には複数の付属屋や離れのような小規模の母屋もあると考えられる。敷地内に耕作地は持っていない。
- 陸屋根、片流れ屋根、腰折れ屋根、招き屋根、切妻屋根など様々な屋根の形式が見られるため傾向として的確に類型化することは難しい。
- 比較的古く大きな住宅の母屋は、南部（神成）と八幡森で多くみられた。屋根の形式は二階建て切妻屋根の平入りで、公道との境界に塀や生垣を設けている。
- 比較的新しく大きな母屋は、八幡森台地の北部をなぞり国道 105 号線沿いと直交する道路沿いで見られた。その母屋の形式は、二階建ての片流れ腰折れ屋根か短手方向に妻入りの形式で、同様の形式の下屋を平面に持っているものが多い。また、一階がＲＣ造の車庫や倉庫、二階以上が居住域になっている招き屋根もしくは片流れ屋根である。これらは道路に対して、招き屋根の場合は屋根勾配が強い平側、片流れの場合は平面の裏側が面している。母屋の裏に耕作地を構えている。
- 大きな住宅以外は、二階建ての片流れ腰折れ屋根か短手方向に妻入りの形式の簡素なものが多い。片流れ屋根の住宅に関しては、道路に対して平面の裏側が面している。
- 小字内の多くの母屋の横や裏に耕作地と付属屋を持っており、その屋根の形式は片流れ・切妻と様々だった。

〈基礎・構造的特徴〉

- 比較的新しい招き屋根もしくは片流れ屋根の住宅は、一階がＲＣ造の車庫や倉庫で、二階以上が居住域になっているものが多い。しかし、他の住宅では基礎高は一般的で一階床高をＧＬより高くする工夫はあまり見られなかった。

〈外壁・意匠的特徴〉

- 付属屋の多くは、亜鉛メッキ板製の簡素な作りで装飾的要素は見られなかった。一部の八幡森台地上の住宅では、左官仕上げの施された立派な土蔵が見られた。
- 母屋に関しては、まず最も特徴的であった八幡森の邸宅の詳細をまとめる。正面一階は一面に下屋があり、横幅いっぱいに木製の格子が付属した水平連続窓がある。
  次に正面二階は、水平連続窓があり、その両端に片流れの付属屋根がかかった突出した戸袋を持っている。またこの水平連続窓と戸袋に対して片流れの下屋がかかっており、

その周囲は装飾の施された破風となっている。
破風は、白い破風面に黒い束と貫の木材を表出させた意匠の破風が見られる切妻屋根であった。また、この邸宅の門は小字内に唯一瓦葺の建築である。
また、台地の斜面地に位置する短手方向に妻入りの住宅の一部で、側面は亜鉛メッキ板製だが、正面は白い破風面に黒い束と貫の木材を表出させて意匠的に見せているもの（粕内の形式）が確認できた。

- またその他の母屋に関しては、改装・新築されたものと亜鉛メッキ板製の簡素な作りのものの集落内での割合は同程度であった。しかし、平入で中央部が二階建ての妻入り形式になっている住宅の一部で、破風から突出している棟木と母屋が、縦方向に二重になっているものが見られた。

【構築物】

〈雪の仕舞い方〉

- また、一階サッシ部に複数の木板をはめて、積雪によって窓ガラスが割れることを防ぐ機構が備えられている。11 月 8 日時点では、板がはめられている住宅は見られなかった。
- 集落の公共物である消火栓は、雪除けが設置されていなかった。共同のゴミ置き場は、金網製の既製品であった。

〈その他〉

- 鉱業が盛んだった頃、銅や銀を集落内で精製する際の不純物として、有害物質（カドミウム）が発生してしまう背景があった。そのため、それを川に流さないように廃材として固めてブロックとして転用した“鍰（からみ）”が、八幡森の邸宅前の石垣とゴミ置き場の基壇、八幡森内の墓地に見られた。

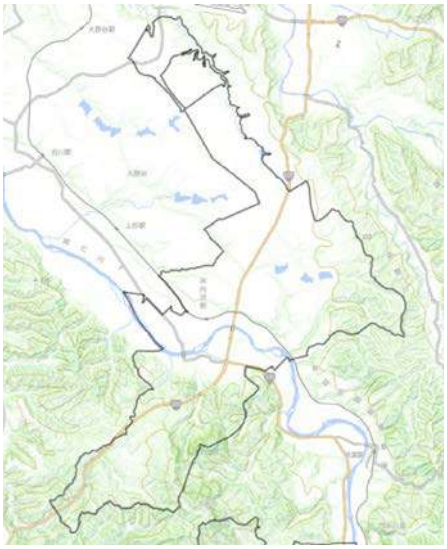
【材料まとめ】

- ガルバリウム鋼板
- 亜鉛めっき鋼板（トタン）
- 樹脂製の波板
- 鍰
- 瓦
- 木板
- ブルーシート

2-9.米内沢

2-9-1. 集落概要

森吉山の北西方、南から流れていた阿仁川が蛇行し北西に流れる場所に位置する。阿仁川の南方に道を中心に集落が形成されている。田は河川沿いに、畑は集落周辺と山際に立地する。



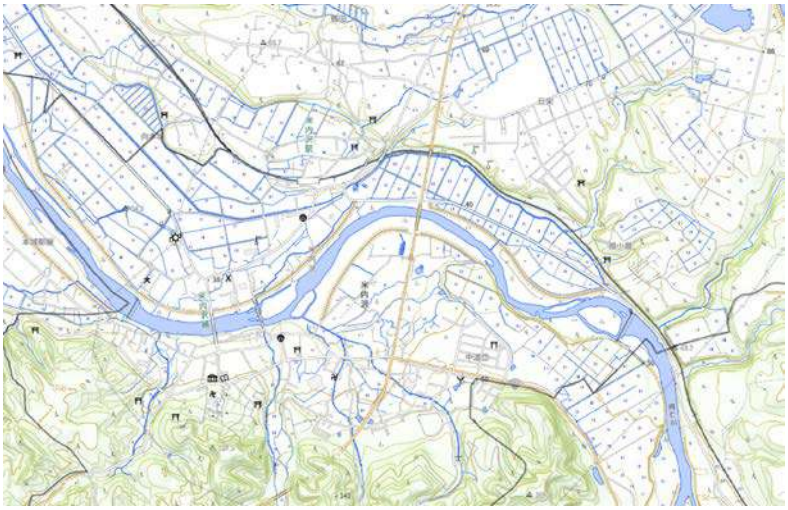


図 50 米内沢の地形

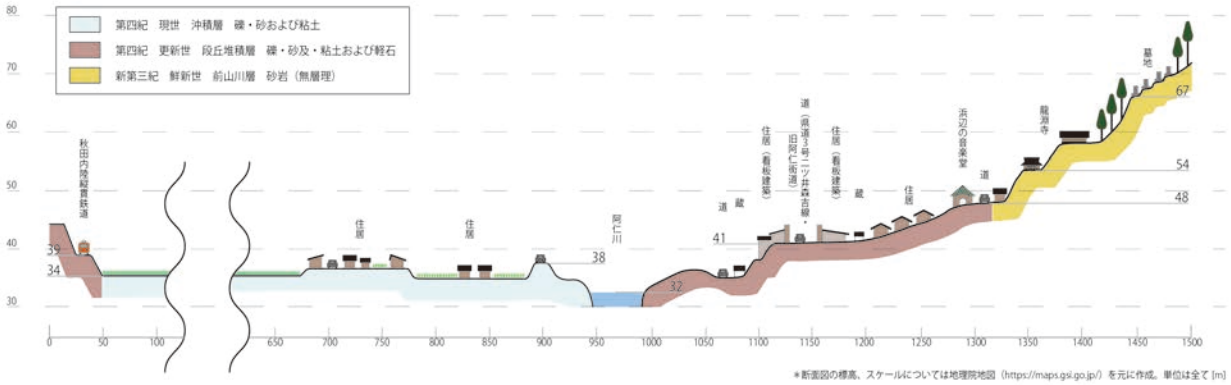


図 51 断面図_米内沢

2-9-2. 地質・地形・水利・自然災害

図 52 航空写真、地形図、地質図

米内沢は堆積岩の上に位置する。集落は主に丘陵地、段丘と谷底平野・氾濫平野に集中する。南岸の集落は主に砂礫段丘にある。北岸では基本的に谷底平野・氾濫平野にあり、それと隣接するのは広範囲の砂礫段丘である。北岸の大野台と呼ばれる地域には、最大 8 段の発達した河岸段丘が形成されている。

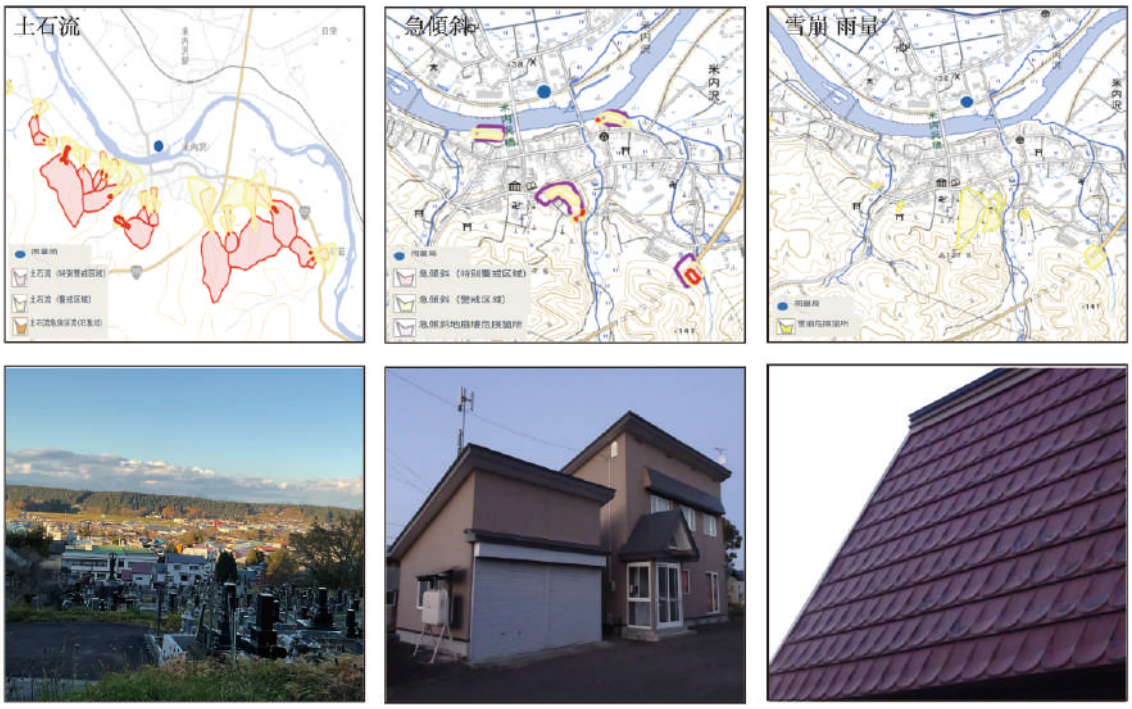


図 53 自然災害

米内沢は調査対象の村の中で最も広く平坦な地形の集落であり、自然災害について調査時に確認することは困難だった。 ただし、山に近い場所では他の集落と同様に急斜面を背負っており、土石流の可能性があると考えられる。 対岸には雨量局があり、大雨の時期には河川の流量が多くなるため、水害の可能性があると想定される。また、 山に近いところと川の近くの河岸段丘の段丘崖に急傾斜地がある。米内沢も雪崩の影響を受けるので、 新しい住居の屋根のデザインや建築材料は、積雪の多い気候に適したものが選択されていると

考えられる。

2-1-3. 地域経営（産業・生業）

産業は主に農業である。北岸川沿いの谷底平野・氾濫平野には大規模な水田が見られ、段丘上に畑がある。南岸にある中心街の付近にはほとんど耕作地がない。住宅の裏手に小規模な耕作地を持つ家も少々見られる。

2-1-4. 信仰

最も大きいのは米内沢神社である。秋田県教育委員会作成の「米内沢よりみちマップ」には、ザキザキという祭りが毎年行われているとの記載があった。もう 1 つは熊野神社で、境内で名称は確認できなかったが、集落内に掲示されていた地図に「熊野神社」と記載されている。境内に「庚申」と書かれた石碑がある。鳥居は金属製で、昭和 56 年に奉納されたものだった。拝殿には手すりが修復された跡が見られた。もう 1 社は現地で確認できなかった。小字内の寺は２軒あり、それぞれが墓地を持っている。特に最も大きい龍淵寺は寺ノ上の大部分を締め、山際の斜面地に多くの墓地を持っている。境内に稲荷神社の本殿、拝殿、鳥居がある。

図 54 熊野神社(左)・庚申と書かれた石碑(中)・龍淵寺(右)

2-2-5. 建築・集落構造

【集落構造】

- 米内沢は、地形を横断した規模が大きな小字で、大まかに三つの集落の塊で構成される。流路を曲げる阿仁川南岸をなぞる県道 3 号線（二ツ井森吉線）沿いを中心に展開される街路村（黒沢・寺ノ下・薬師下・寺ノ上)。阿仁川北岸をなぞる道路沿いに展開される路村（上強瀬・下強瀬・柳原・中島・出向・出向中島)。小字域北部の丘陵地内で山際に背を向けるように配置された構造の集落（長野岱・鶴田・桐木岱）である。本項は、実地調査を行った南岸の街路村について特に取り上げてまとめるが、その他の二つの集落についても Google Earth のストリートビュー機能で詳細を補完した。また阿仁川南岸の県道 3 号線沿い（黒沢・寺ノ下・薬師下）は、商店街特有の街頭や旅館・商店が見られ街路への依存度が高かったため街路村と分類した。この地域は住宅兼商店と純粋な住宅が混ざった配置になっており、建築同士の密度はかなり高い。
- また、この県道 3 号線に面さないその他の住宅も、県道の山側に直行した傾斜した支路に沿って路村的に展開されている（寺ノ下・寺ノ上・薬師下)。この地域は商店機能

を持っていない住宅が多いが、やや住宅兼商店も混ざった配置になっており、建築同士の密度は街路村よりは低い。

- 南岸の集落内には大規模な余剰地はなく水田開発は行なれていない。また水路に関しては、南の山側から集落を横断する 2 本が集落を東西で挟むように通っている。また、小字内の大規模な水田地帯は阿仁川北岸の後背湿地を利用して行なっている。
- 小字内の寺は最も大きい龍淵寺を含めて 2 軒あり、それぞれが墓地を持っている。特に龍淵寺は寺ノ上の大部分を締め、山際の斜面地に多くの墓地を持っている。
- 神社は、Google Earth の航空写真で確認できるだけで南岸の集落内に小規模なものも含め 3 社ある。
- 公共施設・商業施設が多いため、主要なものを抽出してまとめる。公民館、スポーツセンター、高齢者介護施設、消防署、郵便局などの公共施設。食堂、スーパー、薬局、病院、美容院、石材店、銀行などの商業施設。文化施設の浜辺の歌音楽館。給食センター、自動車整備工場などの工場。

【建築】

〈耕配置と屋根形式〉〈母屋と付属屋の関係〉

- 集落内で比較的古くからの姿が残っているであろう住宅は、県道 3 号線沿いの特に薬師下内に位置する 6 軒である。これらは、正面約 10m 奥行き約 20m の細長い母屋で、特徴的な正面のファサードを持つ入母屋屋根妻入り形式の二階建てである。付属屋は、妻入りの土蔵が母屋の裏手に配置されるものが多い。しかし、県道 3 号線の街路村と支路の路村の結節点に位置する佐藤歯科については、母屋と付属屋の配置関係は特殊であった。母屋が支路側に妻入りのため、特徴的なファサードが平側に施されており、また土蔵の向きも県道に向かって妻入りになっている。そのため、母屋の裏手に北側へ 90 度回転した付属屋が配置されている事になる。またいずれも、敷地内に耕作地は、持っていない。
- 陸屋根、片流れ屋根、腰折れ屋根、招き屋根、切妻屋根など様々な屋根の形式が見られるため傾向として的確に類型化することは難しい。
- まずは、街路村（黒沢・寺ノ下・薬師下）によく見られる建築の傾向をまとめる。建設年代は、住宅兼商店のものは前述した住宅と同程度に古く個性的だが、住宅機能のみのものは比較的新しかった。
- 駅前の中心街から遠のくにつれ既に廃業しているものも多いが、県道 3 号線沿い（黒沢・寺ノ下・薬師下）は、短手正面に看板を持つ住宅兼商店が散見される。この住宅は、二階建ての片流れ大屋根か短手方向に妻入りの形式のものが多い。片流れ屋根の住宅に関しては、道路に対して平面の裏側が面している。いずれも道路側は商業機能を持った二階建てだが、道路に対して奥方向は平屋になっている。

・ その他、商業機能を持っていない路村（寺ノ上など）の住宅は、二階建ての招き屋根もしくは片流れ屋根のものが多い傾向にある。これらは道路に対して、招き屋根の場合は屋根勾配が強い平側、片流れの場合は平面の裏側が面している。
・ 大小関わらず集落の中で特に商店兼住宅、または県道３号線付近（黒沢・寺ノ下・薬師下）の住宅の多くは、独立した付属屋（土蔵）を持っている。付属屋は、妻入りの土蔵が母屋の裏手に配置されるものが多い。一方、県道３号線付近から遠のくにつれ母屋の周囲に付属屋（倉庫・車庫）を持つ傾向にあり、その屋根の形式は片流れ・切妻と様々だった。

〈基礎・構造的特徴〉
・ 基本的に、基礎高は一般的で一階床高をＧＬより高くする工夫はあまり見られなかった。
〈外壁・意匠的特徴〉
・ 付属屋（倉庫・車庫）の多くは、亜鉛メッキ板製の簡素な作りで装飾的要素は見られなかった。しかし、付属屋（土蔵）に関しては左官仕上げの施された立派なものであり、多くの蔵の破風板には共通して横に引き伸ばされた渦のような模様が見られた。
・ まず、比較的古いであろう住宅の母屋に関しての詳細をまとめる。正面一階は左右非対称で左右のどちらかに玄関が寄っており、また引き違いサッシを持っている。正面一面に裳階（付属屋根）を持っているものは、６軒中５軒確認できた。
・ 次に正面二階は、横幅いっぱいに水平連続窓があり、その両端に突出した戸袋を持っている。基本的にその戸袋に対してそれぞれ切妻平入りの付属屋根がかかっており、さらにそれら窓・戸袋・付属屋根に対して入り母屋屋根がかかっている。また、破風には特別に意匠の施されていない。しかし、６軒中１軒は破風面を広く使って戸袋に対しての付属屋根が複雑にかかっており切妻屋根であった。また６軒中１軒は、正面二階の横幅いっぱいに水平連続窓を持っておらず、阿仁銀山の宮越商店に似た白い破風面に黒い束と貫の木材を表出させた意匠の破風が見られる切妻屋根であった。また６軒中１軒については、現在は阿仁ラジオ店という電器屋になっていた。
・ またこの系統の母屋であるが、二階戸袋が省略されているもの、戸袋に対しての付属屋根が省略されているもの、入母屋屋根でなく切妻屋根のものなどが、林ノ腰・黒沢・寺ノ下などの薬師下を中心とした際に、県道３号線の端にあたる場所で４軒ほど確認された。また、県道３号線以外では見られなかった。
・ 看板を持つ二階建ての商店建築の看板はＲＣ造で、複雑な凹凸や装飾が施されたものが多かった。また、二階正面に引き違い窓を持っており、装飾が施された手すり（柵）の存在が確認できるなど、集落中心部は手の込んだ建築が多かった。
・ 一方、集落中央部の路村に面する改装・新築されたもの以外の母屋に関しては、ガルバリウム鋼板・亜鉛メッキ板製の簡素な作りのものもみられた。

【構築物】

〈雪の仕舞い方〉

- また、一階サッシ部に複数の木板をはめて、積雪によって窓ガラスが割れることを防ぐ機構が備えられている。11 月 8 日時点では、板がはめられている住宅は見られなかった。
- 集落の公共物である消火栓は、雪除けが設置されていなかった。共同のゴミ置き場は、金網製の既製品であった。

〈その他〉

- 鉱業が盛んだった頃、銅や銀を集落内で精製する際の不純物として、有害物質（カドミウム）が発生してしまう背景があった。そのため、それを川に流さないように廃材として固めてブロックとして転用した“鍰（からみ）”が龍淵寺の一部の墓地の基壇で見られた。

【材料まとめ】

- ガルバリウム鋼板
- 亜鉛めっき鋼板（トタン）
- 樹脂製の波板
- 鍰
- 木板